沖縄観光の父 宮里定三

沖縄観光の父 宮里定三

沖縄観光の父 宮里定三

ご挨拶

宮里定三顕彰事業実行委員会 会長
照屋 修興

戦前、戦後を通じ沖縄観光の発展、育成に多大な尽力をし、今日の観光産業の基礎を築かれた宮里定三氏の功績を顕彰し、その足跡を記念誌に遺すことは、次代を担うわれわれの重大な使命であると考えます。観光産業に従事する有志が集まりこの事業を取りまとめることになりました。その趣旨に賛同する輪は観光産業のみならず経済界にも大きな広がりを見せました。多くの関係者の多大なる協力の下、記念誌作成事業が執り行えることに大きな喜びを覚えると共に今後の観光産業従事者にとって大きな指針となり、更に勇気と自信に繋がるものと確信いたします。この事業に携わった関係者、ご賛同、ご協力いただいた各団体、組織、企業、個人の皆様にこの場をお借りして心より感謝の意を申し上げます。

沖縄観光産業の更なる発展と輝かしい未来を共に創り上げましょう。

平成二十八年三月吉日

祝辞

沖縄県知事
翁長 雄志

「沖縄観光の父・宮里定三」の発刊を心からお喜び申し上げます。

思い起こしますと、宮里定三さんの足跡は沖縄観光の歩みそのものであり、その生涯は、沖縄の観光振興と発展に心身ともに尽くしてこられた人生でした。

昭和十六(一九四一)年に、二十九歳の若さで宮里さんが設立された「沖縄ホテル」が、本格的なホテルが乏しい沖縄において、大切なお客様をお迎えすることができる唯一の「賓客ホテル」として、国内外の多くの要人に利用され、沖縄の心を世界に発信してこられました。

残念ながら、沖縄戦の戦火の中でこのホテルは閉鎖されることとなりましたが、昭和二十六(一九五一)年には、戦争の傷跡が癒えない時期にいち早く沖縄ホテルを再建され、荒廃した沖縄の復興に取り組んでこられました。さらに、那覇市観光ホテル旅館事業協同組合の設立と初代組合長就任、沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合の設立と理事長就任など、沖縄の観光産業の先駆者として、今日の沖縄観光の隆盛を実現した宮里さんの御功績は誠に大きなものがあります。

宮里さんの多くの活動の中でも、かりゆしウェアの普及に尽くされた御功績は広く県民の記憶に残っています。沖縄県観光連盟会長御在任中に「おきなわシャツ」を発案され、沖縄らしさを表すシャツで沖縄観光をアピールするため、県外視察の際には必ず着用しておられました。私自身、沖縄ホテルの近所で生まれ暮らしておりましたので、常にかりゆしウェアを着て仕事をされる宮里さんの後ろ姿を拝見し、深い感銘を受けたことを思い出します。

二〇〇〇年の沖縄サミットで各国の首脳に着用されたことで、かりゆしウェアは広く市民権を得ました。その後、毎年総理や沖縄担当大臣に贈呈されて全閣僚が着用しての閣議が開催されるなど、宮里さんが望んだ「ハワイのアロハシャツにも負けない」沖縄のオリジナルシャツとなっています。宮里さんも天国で、あのすてきな笑顔で喜んでおられることと思います。

沖縄を訪れる観光客は年間七百万人を超え、県では一千万人の観光客を目指して取り組んでおります。沖縄の主要産業に成長した観光産業を生み育ててきた宮里さんの御遺志にお応えするためにも、これからも関係者の皆様と一緒に全力で取り組んで参りますので、どうかこれからも故郷沖縄を見守っていてください。

結びに、記念誌の発刊に当たって改めて宮里定三さんの御遺徳に深く思いを寄せるとともに、懸命の努力をされて宮里定三さんの記録を残された顕彰事業会の照屋修興会長始め関係者の御尽力に心から敬意を表して、お祝いのご挨拶といたします。

祝辞

一般財団法人
沖縄観光コンベンションビューロー会長
平良 朝敬

宮里定三顕彰碑の建立並びに記念誌の発刊にあたり、心よりお慶びとお祝いを申し上げます

沖縄経済を牽引するリーディング産業として飛躍的に発展した本県観光産業。ここまで大きく発展してきたのは宮里定三氏の先見の目と強力なリーダーシップ発揮の賜物であり「沖縄観光の父」として県内観光業界はもとより県経済界から今でも高く評価されていることに対し、敬意と感謝の念に耐えません。

戦前に県内ホテル第一号「沖縄ホテル」の責任者を務め、戦後は初の県内ホテル第一号を開設。当時の年間入域観光客数が三万人と苦難な時代からその後の五百万人時代にまで発展させるなど、沖縄観光を大きく育てた実績は誠に多大なものがあります。

また、沖縄県観光連盟会長、那覇市観光協会会長、那覇市観光ホテル旅館事業協同組合長、沖縄国際海洋博観客対策委員等を歴任し、まさに観光産業推進のリーダーとして沖縄観光の将来を担う「国際海洋博覧会」の誘致と成功に向けた積極的な取り組みを行いました。一方で、「海洋博ショック」で観光産業全体が厳しい経営環境にある中、いち早く「沖縄県観光宣伝隊」の仕組みを構築し、全国に観光客誘致運動を展開。このような積極的な取り組みが奏功し、翌年には急激に落ち込んだ観光客が一気に百二十万人台まで回復し、その後百五十万人、百八十万人と僅か三年で上昇気流をつかみ取り、その後今日まで安定的に推移していることは周知のとおりであります。

その他、”沖縄らしさ“を演出する目的にスタートした「おきなわシャツ」はその後、沖縄サミット開催を機に「かりゆしウェア」として広く普及。今では、地球温暖化防止及び省エネルギーに資するためのクールビズの一環として全閣僚にかりゆしウェア着用が励行されており、今に至っております。

宮里定三氏の実績がそのまま沖縄観光の歴史に重なるほど、沖縄観光の発展に寄与した功績は、決して忘れてはならないものと思います。当財団としても宮里氏の功績を踏まえ、今後とも魅力ある観光プログラムの開発や次代を担う若者のための観光人材育成事業等に取り組み、観光・コンベンション産業の振興に寄与してまいります。

終わりに、「宮里定三顕彰事業実行委員会」の皆様の取り組みに対し敬意を表しますとともに関係各位のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げ、祝辞といたします。

目次

ご挨拶
宮里定三顕彰事業実行委員会　会長　照屋修興

一、祝辞 …… 4

沖縄県知事　翁長雄志
一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー　会長　平良朝敬

二、宮里定三の軌跡と沖縄観光史 …… 11

第一章　戦前・戦中の宮里定三と沖縄観光
第二章　沖縄観光の復活へ
第三章　本格化する沖縄旅行
第四章　「海洋博」がもたらしたもの
第五章　さらなる飛躍へ
第六章　沖縄ツーリズムの新時代
第七章　これからの沖縄観光に向けて

三、スペシャルインタビュー …… 75

株式会社　南都　代表取締役会長　大城宗憲
ホテルサンパレス球陽館　取締役会長　金城幸松
沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合　元専務理事　大城吉永
沖縄ホテル　代表取締役社長　宮里一郎

四、寄稿文 …… 92

沖縄観光コンベンションビューロー　元会長　平良哲
沖縄観光コンベンションビューロー　前会長　上原良幸
劇作家・プロデューサー　亀島靖
ロワジールホテルズ沖縄　元専務取締役総支配人　新城朝吉

年表 …… 104
編集後記 …… 110
協賛者一覧 …… 111

宮里定三の軌跡と沖縄観光史

凡例

一、本書は原則として、明治四十五(一九一二)年から平成二十七(二〇一五)年までの宮里定三氏の軌跡と沖縄観光の歴史をまとめたものである。

二、用語、その他については次のように統一した。

・原則として常用漢字・現代かなづかいを用いたが、引用文、固有名詞、常用化されたものなどはそれに従った。

・人名はすべて敬称を省略し、役職、法人名、団体名等は当時の名称を基本とし、必要に応じて(現・〇〇)と表記した。

・株式会社、合資会社等は、文中で再登場した場合は原則として省略した。

・数字は漢数字を用い、万以上の数字には億・万の単位を併用した。

・年号は原則として元号と西暦を用いた。

・度量衡は原則としてメートル法に従った。

・引用部分は原則として、原文のままとした。

第一章　戦前・戦中の宮里定三と沖縄観光

古来のモラルに「賓旅には配慮せよ」という伝統がある。中国の春秋時代、諸候が国際会議をした「会盟」の際には、外国人や旅行者を大事にすることが再三謳われている。その点、琉球王国ひいては沖縄は、まさに「賓旅」を歓待する国であった。遠く海のかなたにあるというニライカナイから富と幸せがやってくるという思想を抱く人々にとって、海をこえてやってきた来訪者は客人（「まろうど」あるいは「まれびと」）であり、歓待して迎えるのが当然のことであるとともに、喜びであった。

そうした伝統は今でも「イチャリバチョーデー」の言葉に代表されるように、ウチナーンチュのホスピタリティ精神に息づいている。このことを考えれば、いま沖縄観光が隆盛をきわめ、さらに伸びようとしているのも当たり前のことかもしれない。しかし、実際には沖縄観光がたどってきた歴史には多くの苦難があり、先人たちの刻苦勉励がなければ、現在の繁栄はありえなかった。

昭和三十二（一九五七）年、沖縄への渡航者は一一、七九三人だった。それが平成二十六（二〇一四）年には沖縄県入域観光客数は七五八、三〇〇人を数えるまでになった。この間にいくつもの荒波があり、そのたびに小さな島・沖縄は揺さぶられ、そこに根を張ろうとしていた観光産業の芽は危機にさらされてきた。その危機を乗り越えてきた原動力は、沖縄観光に携わる人々の一致団結した協力によるたゆまぬ努力であった。

その中心にあったのが宮里定三である。定三は戦前、沖縄第一の本格的ホテルであった「沖縄ホテル」の支配人として各国から賓客を迎え、戦後まだ観光旅行など考えられない時期に沖縄ホテルを再建し、「沖縄の未来は観光産業にある」と沖縄観光の歴史を切り開いてきた。その一徹なまでのリーダーシップと、困難な時代にあって先を見通す洞察力で沖縄観光の舵をとり、ここまで導いてきた。その軌跡は、そのまま沖縄観光の歴史そのものである。

沖縄の観光史を体現しているともいえる、その人生をたどってみよう。

一、生い立ちから海外移民の斡旋に携わるまで

宮里定三は明治四十五（一九一二）年五月十九日、羽地村真喜屋（現・名護市真喜屋）で羽地村耕地整理組合に勤める父・松助と働き者の母・カナの三男として生まれた。明治四十五年は明治天皇の崩御で大正元年と年号が変わる年であり、まさに明治最後の世代ということになる。

父は羽地村耕地整理組合に勤めるサラリーマンだった。熱心なクリスチャンで、〝田舎牧師〟と呼ばれたほど。正義感が強く、精神的に豊かであればいいという人だったが、裏返せばがんこおやじだった。

父以上にきついのが母。しつけにはうるさく、悪いことをすれば容赦なく小言が飛んだ。家事万端に通じる働き者で、米作りや養豚で暮らしを助けていた。

七歳になった大正八年、稲嶺尋常高等小学校に入学した。当時の校長は、後に本部町長になった山城宗雄氏。私の成績はいつも十番くらいをウロウロしていたから、この方面で目立つことはない。代わりにがき大将で名を挙げた。

可もなく不可もなくといった状態で、尋常高等科を昭和二年に卒業した。後にも先にも学校をきちんと終えたのは、小学校だけ。この後からは、みんな中途半端。まず最初につまづいたのが、軍事教練をする青年学校だった。

（『私の戦後史・第五集』沖縄タイムス社、一九八一年から）

母の田畑を手伝いながら青年学校に通っていた定三は、農業よりも当時ブームだった移民に心が動いた。どんどん海外に出て行く同級生たちを見て、南米へ、世界へと雄飛する夢に燃えて青年学校をやめ、沖縄

を出ようと模索していた時に、叔父の宮里貞寛から誘いの手が伸びた。貞寛は神戸で旅館を経営していた。「働きながら学校へ行かないか」という叔父の言葉は定三にとって好機到来であった。「これを足がかりに、なんとか一旗揚げよう」。そんな野心が、むらむらとわいてきた。

昭和五(一九三〇)年六月、台中丸で神戸に渡ったときは十九歳だった。叔父が経営する「ゑびす屋旅館」は今の元町駅付近にあたる北長狭大通りにあり、フランス人の商館を改造した建物で、収容人員は百五十人くらいの規模だった。旅館業だけでなく、旅行社の機能も果たしていたゑびす屋で、定三は旅券取得やビザの申請を仕事とした。その傍ら、学校にも通ったが、長くは続かなかった。

半年たって仕事も覚えたので、実業英語学校へ通った。だが、三カ月で退学。その後に、五年制の神港商業学校夜間部へ入学。やはりここも二年しか続かない。どちらも夜遊びのせいだった。ぽっと出の私には、都会のすべてが珍しくまた楽しかった。ミルクホールに通い、長時間ねばるのを誇りにした。酒は飲む。ダンスホールには行く。女遊びは派手。これで続くはずがないのは、もっとも。

(『私の戦後史・第五集』から)

このときも移民の夢は捨てずに持ち続けていた。だからこそ、学校へ通って必要な技能を身につけようとした。「貿易商社の仕事につくには英語を勉強しなければ。簿記やそろばんも必要だから、商業学校へ」。定三は夢をあきらめずに、学業への意欲を忘れていなかった。自身は学校を中途でやめたことを自虐的に語っているが、後年の英語力や経理・経営の基礎はこのころの勉学と経験で養われたのであろう。それだけでなく、沖縄観光に生涯をかけるに至ったきっかけのひとつは、このときに移民の世話をしてきた見聞にあったのではないかとも思われる。しかし、まだ定三は旅館業を一生の仕事にしようとは思っていなかった。「旅館業の面白さにまだ気づかず、自分の道を決めきれないでいたのである」と、のちに語っているように、海外雄飛の夢は断ち切れずにいた。

当時、パスポートの下付は国際港のある横浜、神戸、長崎にある県庁外事課に限られた。その手続きやビザの申請を旅館が代行したが、神戸にはあっせん許可をもつ旅館が七軒あり、そのなかでゑびす屋は、沖縄県出身者が経営する唯一のものだったので、県出身者のほとんどが利用した。

移民を奨励する政府のもと、沖縄でも「沖縄を救うのは、ただ海外発展のみ」と宣伝され、「ソテツ地獄」と形容された不況の沖縄から逃れて海外雄飛を夢見た多くの人々が神戸港をあとにした。

定三は、アメリカの委任統治領だったフィリピンの担当から始まり、スマトラ、ボルネオ、ジャワの係となってその後にアルゼンチン、ペルーを任された。船はおおよそ週に一度は出た。そのたびに歌を歌い、五色のテープと日の丸の旗で見送ることを繰り返した。見送りのベテランとなった定三は、五年目に神戸市内の栄町支店長を命ぜられ、渡航手続きだけでなく、客の受け入れから廚房にいたる旅館業の裏表一切を取り仕切ることになる。時に昭和十(一九三五)年、定三は二十四歳となっていた。ここにいたって、責任を持つことで自信と気概が定三に生まれた。

最初は当分この仕事をやっていて、そのうちいい職をみつけたら辞めればいいさ、と軽い気持ちでいた。ところが、責任を持たされると、自信が沸いてくる。興味も出てきた。私は、「よし、やってやるぞ」と、旅館業で身を立てる決心をしたのである。

(『私の戦後史・第五集』から)

渡航手続きではビザ取得がもっとも難しかった。「過去五カ年に前科なし」と書かれた警察の証明書を忘れると、沖縄から取り寄せたのでは間に合わず、芋に警察署長の名前を彫って書類を偽造したりもした。領事面接に付き添ったり、応答を一問ずつ教えこんだりするのも仕事の一部だった。あるいは性病が原因で渡航を延期させられた人が「旅館は手続きを長引かせて、余計にもうけている」というわさを流すなど、さまざまな難儀を味わったのもこの頃のことである。

二、沖縄にＶＩＰが泊まれるホテルを

戦前、本土からの沖縄観光は昭和十二(一九三七)年に大阪商船が四千五百トン級の浮島丸、波之上丸を擁して企画した七泊八日のツアーを始まりとする。神戸を出てから沖縄に着くまでに二日を要したため、実質的な沖縄滞在は三泊四日程度だったという。当時の沖縄観光では、美しい海よりも沖縄独特の文化・風俗が前面に押し出されていた。その観光日程を見てみよう。まずは首里城、識名園や波之上宮、崇元寺などを訪れ、残波岬まで足を延ばして製糖工場や空手を見学したり、夜には琉球舞踊や古典劇を鑑賞し、豚肉料理を賞味し、おみやげに紅型を買っていく。残された当時の旅行者の手記からはそんな当時の観光旅行がうかがわれる。

大阪商船がつくった観光パンフレットには「南海の王国として古来数奇な歴史に育まれてきた沖縄」「蘇鉄の山、榕樹の巨木、バナナの林、パパイヤ、マングローブ、熱帯果実の色」「昔ながらの質朴敦厚な人情」などの言葉が踊る。現在の沖縄観光の原型を思わせるが、観光資源を開発する段階ではなく、沖縄がまだ観光客にとって初々しい処女地であったことをうかがわせる。沖縄そのものがまだ異国情緒たっぷりのエキゾチックな存在であった。この沖縄ツアーは二十三回実施されたが、すでに軍国主義の影は濃く、太平洋戦争の始まった昭和十六(一九四一)年に中断した。

この頃、佐藤惣之助の『旅窓読本』の刊行や、昭和十四(一九三九)年の柳宗悦や濱田庄司を含む日本民芸協会会員による約二か月間の沖縄団体旅行が、沖縄のエキゾチシズムや自然・風俗・工芸への憧憬を高める効果を果たした。また、この前の昭和十一(一九三六)年には、沖縄観光協会が設立された。会長には那覇市長が、副会長には那覇市商工会議所会頭が就任している。まさに沖縄観光は緒に就いたばかりだった。

日本民芸協会はもっと沖縄を全国に紹介しようと、二回目の沖縄団体旅行に民芸協会のみならず、写真家、映画関係者、旅行業や販売業に携わる人たちなどを同行した。この旅行中に開かれた「沖縄観光と文化を語る座談会」(沖縄観光協会と郷土協会の主催)では、「観光の立場からもっと積極的にこの素晴らしい土地を世界的なものとしよう」という趣旨のもと、観光の専門家から今後の方策として

戦前の首里城正殿。昭和4(1929)年、国宝に指定された。
那覇市歴史博物館提供

一:ホテル建設などの観光開発
一:伝統的な建築や景勝地の保存
一:景勝地への見苦しい構築物設置の禁止

などが挙げられている。

そしてこの席上で沖縄での標準語励行運動が行き過ぎではないかと議論になり、歴史的な「沖縄方言論争」が巻き起こった。沖縄の独自性を大事にしたい中央の知識人と、標準語によって格差をなくし本土化をめざす沖縄側との認識の隔たりが如実に現れた論争であったが、当時の沖縄と本土の心理的距離を示すものでもあった。

柳宗悦ら一行が指摘したように、この頃の沖縄にはホテルがなかった。戦前の那覇にはちゃんとした旅館が七、八軒しかなく、泊まり客のほとんどが本土商人だった。いちばん大きかった、鹿児島県出身の久保氏経営になる「蓬莱館」にＶＩＰを泊める部屋が一部屋あるきりで、地方から那覇に出てきた人たちは村宿小(むらやどぐぁー)という、各地出身の人々によって運営されていた民宿のようなところを利用していた。

当時、三井信託銀行に勤務していた比嘉良篤氏が上司の専務を沖縄に案内した折り、「蓬莱館」の特別室に泊まってもらったところ、たまたま同時期に沖縄に来た荒木陸軍大将に部屋を明け渡して停泊中の大阪商船の船へ移された。専務に「君の郷里はつまらんところだな」と言われた比嘉氏は、定三の叔父・宮里貞寛に沖縄にホテルを作ることを懇請する。渕上房太郎沖縄県知事(在任:昭和十三~十六年)、その後の早川元知事(同:昭和十六~十八年)からも正式な要請があったが、大金のかかる大事業でもあり、貞寛はなかなか首を縦に振らない。

なかなか腰をあげない叔父に、比嘉氏から催促の手紙である。「アメリカ帰りの中谷善英氏(元嘉手苅・西原村出身)は、沖縄のために開南中学校を作ったじゃないか。君も郷里のために一肩脱いでくれ」という内容。ハワイから錦衣帰国した経歴を持つ叔父は、そう言われてやっと覚悟を決めたのだった。

(『私の戦後史・第五集』から)

那覇市泊にあった崇元寺は沖縄戦により消失・全壊した。
那覇市歴史博物館提供

そして、この大役を定三に割り振った。当時、結婚したばかりの二十九歳だった定三には「大迷惑」だったようである。しぶしぶ引き受けたが、「やるからには」と設計も自分で行った。

十九万九千円で合資会社をつくり、ホテル建設がスタートした。そして私はその大金と総支配人の肩書をひっ提げて、沖縄へ乗り込んだ。

やると決心したら、だれにも負けたくない。どこにもないものを、造ろうと考えた。それもどこから見ても、沖縄だとわかるものを。設計は自分で。

（『私の戦後史・第五集』から）

定三は、建築には素人だったにもかかわらず、大工の棟梁を連れて本土の旅館を見てまわり、それぞれのいいところを取った上で、さらに沖縄らしさを出そうと苦心した。内部は総ヒノキ、窓は大きく開いた上に片側を廊下にして夏の暑さをしのげるようにした。外部はモルタル塗りにし、上には朱色の瓦を唐破風造りにしてのせる。玄関には勝連のトラバーチンを用い、日本画家である山田真山氏の助言を容れてヘゴの木で垣根をつくると沖縄らしい調和のとれた仕上がりになった。貴賓室は広さ三十坪、壁には紅型の布を張り巡らし、畳のヘリにまで紅型を使った。風呂場と便所はヒノキづくり。部屋に便所がついているのはまだ珍しかった時代である。三階には特別に会議室を作ったが、この会議室は後に沖縄戦の作戦室となった。

建築にはまったくの門外漢であったが、物怖じしない勢いと若さで沖縄最初のホテルは完成した。昭和十七（一九四二）年二月十一日、総工費三十万円、那覇市波之上宮前に地下一階、地上三階全三十六室の沖縄ホテルが正式にオープンした。すでに前年に日本はアメリカと開戦し、太平洋戦争が勃発していた。軍国主義と統制経済の時代だったにもかかわらず、家具や消耗品は特別の業務用衣料切符で賄われ、建築途中でも知事の手助けが相当あったようだ。「時局柄」が幅をきかせた当時にはありえないほどの立派な、技術の粋を集め、最新の西洋文化を備えた建築であった。なかでも地元の人々を驚かせたのは電気で動く冷蔵庫、水洗便所、蛇口から出るお湯だった。見物人があとをたたないほどだったが、これがスパイ騒動のもととなる。

水洗便所は、今と違ってモーターで水を汲み上げていたが、「便所でモーターの音がするのはおかしい」と疑念をもたれたのが発端らしい。あそこにはアメリカ製の冷蔵庫がある。フロントでは郵便局でもないのに電報が打てる。はじめて見る西洋文化と時勢が合わされて「沖縄ホテルのおやじがスパイの大将だ」という流言蜚語となり、ついには「浜で処刑された」というデマまで飛んだという。貴賓室に偉い人が泊まれば玄関に憲兵が立つのは当たり前なのだが、事情を知らない人たちには「宮里が逮捕された」というわさが真実味を帯びた。

かばん事件もあった。陸軍航空総監一行からと、徴用船の船長から、同じ日にそっくり同じようなかばんを預かり、翌朝に両方とも海軍の副官が持っていったために海軍、陸軍、憲兵隊がホテルに押しかけて総支配人の宮里定三と船長が取り調べられた。船長のかばんの中には海軍の機密地図が入っていたのだ。この件はなんとか無事に済んだが、この騒ぎは周囲の人々の疑念を深めることになった。最新の西洋文化をあまり知らなかった当時の人々にとって、はじめて見る本格的ホテルの威容はあまりにも眩しくうつったのだ。

貴賓室の最初の宿泊客は、朝鮮の李王殿下（韓国併合後、大日本帝国の王公族としての第二代李王、李垠）だった。まだ工事途中の昭和十六（一九四一）年暮れに県庁職員を総動員しての仮オープンで、「もしも」の失態があれば知事の首が飛ぶような重大任務だった。とくに知事の緊張ぶりは相当なものであったらしく、定三は「面目を施した早川知事は、目に涙をためて『ごくろう』と言ってくださった。私も恐縮と感激で、胸が詰まった」と回想している。

同じ年に国賓としてタイ国のワンワイ・タヤコン殿下が、次には初めて皇室から三笠宮殿下と、次々にＶＩＰが沖縄ホテルに宿泊した。三笠宮殿下の接待では、最高級の琉球料理でもてなした。料理人は尚家に仕えていた新垣淑規氏、材料は特別に揃えられ、卵は試験場から産まれた時間まで記入されて運ばれ、魚は糸満警察署長が直接持参し、県衛生技師がその間ずっと立ち会ったという。給仕は良家の子女から選ばれていた。

タイ国のワンワイ殿下を接待した奉仕団。佐藤喜一特高課長、具志堅宗精警防課長の顔も見える（沖縄ホテルの玄関前、昭和16年）

普通の旅館は警察の認可だが、国際級だった沖縄ホテルは商工大臣の認可が必要だった。そのために宿泊料金も国の言うがままで、一泊二食で三円から五円は代用教員の月給が三十円の時代では、決して安いものではなかった。国際級のレベルと品位を保つために、誰でも泊めるわけにはいかなかった。自由に客は選べても、金のやりくりでは頭をかかえることもあった。昭和十八(一九四三)年七月には東條英機総理大臣が副官の佐藤賢了事務局長を伴って来県し、沖縄ホテルの貴賓室は沖縄の面目を保った。

ちょうど大阪商船が、浮島丸や波之上丸といった五千トン級の客船を運航させたころ。昭和十二年からは、小さな飛行機も飛んでいた。だが、わざわざ沖縄を訪ねる人は、少なかった。観光とは縁のない静かな島だったのである。

たまに来るのは医者とか芸術家で、紅型や沖縄の歴史の研究をしにだった。何日お泊りですかと聞いても「わからん」という人ばかり。一カ月も二カ月も、ゆっくりと沖縄を見ていた。本当に沖縄を愛している人たちだったのである。

（『私の戦後史・第五集』から）

三、戦争の足音

やがて沖縄ホテルは軍司令部の命令で将校専用の指定ホテルとなり、まるで「将校宿舎」のようになった。三階の会議室は作戦室に使われ、「参謀会議室」になった。昭和十九(一九四四)年七月頃、司令官渡辺中将の移転祝いにすきやきを用意したが、乾杯の前に宮里総支配人が追い払われたことがあった。実はこのとき、サイパン島玉砕の電報が届いていたのだった。日本は敗色濃厚になり、戦争の行方を冷静に見る目があれば、サイパンの次に沖縄がやられるのは自明だった。

十・十空襲後の武徳殿は、占領した米軍の指揮所となった。那覇市歴史博物館提供

昭和十九(一九四四)年十月十日、いわゆる「十・十空襲」の日、定三は戦死した末弟定和の村葬に出るため羽地に帰っていた。空襲と聞いて驚いて帰ると、ホテルは幸運にも焼け残っていたが、何千発もの弾丸を受け、ガラスのほとんどが割れていた。

目ぼしい建物で残ったのは沖縄ホテル、天理教会、武徳殿くらいのものであった。そのためにホテルごと定三も徴用され、軍の指揮下に置かれた。以来連日の空襲で混乱するなか、次々と軍の要人が来ていっぱいになり、それでも「なんとかしろ」と無理やり押しこむ毎日がつづく。そのなかにはまだ若い特攻隊員たちもいた。彼らは天候不良で飛行機が飛ばず、作戦決行を延期させられていた。

一度死を決意した者が、延ばし延ばしにされたのである。興奮して夜も眠らない。また寂しいのか、だれかをつかまえては話をしていた。彼らの心中を思うと、私は胸が詰まった。

心を慰める酒があるはずもない。なんでもいいからあるだけ食べさせようと思っても、切り干しダイコンと福神づけ、ゴーヤーのつけものしかなかった。大事にとっておいた黒砂糖を出すと、それはもう大喜び。あどけない少年たちだった。

（『私の戦後史・第五集』から）

昭和二十(一九四五)年三月末、米軍上陸の二、三日前に定三らは三十七人の従業員を引き連れて羽地へと疎開した。司令部付陸軍大尉だった長兄の貞雄と佐藤特高課長が「敵の上陸、激戦化が予想される」と勧めたからだった。また戻るつもりでいた定三の楽観的な見通しは外れ、羽地と久志の境界で妻子と両親に再会したあとは、三か月も山中での逃避行となった。

真喜屋では移民者が多く、英語が話せてアメリカの事情に通じていた人がいた。隠れていた二千人もの避難民を堂々と下山させようと米軍と交渉し、自分の部落にすぐ帰ることはできなかったが、食料の保証などを受け入れさせて七月末に下山して仲尾次の収容所に入った。二か月後には真喜屋に帰り、定三は配給所主任に任命された。

昭和25(1950)年頃に撮影された沖縄ホテル。那覇市歴史博物館提供

残骸となった沖縄ホテルの玄関。那覇市歴史博物館提供

第二章　沖縄観光の復活へ

沖縄を訪れる人たちはどのように増えてきたのだろうか。沖縄への定期航路は昭和二十五(一九五〇)年頃から始まったが、当初は渡航手続きと為替管理が厳格で、観光どころではなかった。

外国扱いであった占領下の沖縄へ渡航するためには、米軍総司令部発給の許可証が必要であった。さらに外貨の申請では「外貨買入許可申請書」などの五種類の書類を外務省渡航課に提出し、渡航審査連絡会の審査があり、その承認を得てから次に総理府南方連絡局または都道府県知事に特定地域への入国許可申請を行い、ここでは米国民政府が申請書をチェックした。民政府は詳細なブラックリストを持っており、共産党員は不可、労働組合の幹部や記者なども許可をもらうのは困難だった。この許可を得ても手続きはまだ終わらず、ここからようやく一般身分証明書の申請を行うことになる。手続きには戸籍抄本その他の書類が必要で、実に煩瑣なプロセスが課せられていた。

こんな時代では、視察や業務での渡航が中心にならざるを得なかった。本土から来る日本人よりもむしろ、米国などからの日系二世たちの観光団の方が早かった。

一、復興の槌音

昭和二十五(一九五〇)年三月には、早くもアメリカン・プレジデント・ラインのゴードン号がハワイから来航し、六十二人が「祖国」訪問を果たした。当時まだ軍関係業務に携わっていた宮里定三は、ゑびす屋で移民斡旋を行っていた経緯もあり、訪問団に知り合いが多く、多忙をきわめたという。

定三は『日本交通公社協定旅館連盟沖縄支部20年のあゆみ』のなかで「第2次大戦で焦土と化した沖縄に、初めて訪れた観光団は、ハワイ在住の県人会が企画した「沖縄観光慰問団」で、衣類や食料品の援助物資を満載した米国のダラー汽船(＊注1)が勝連のホワイトビーチに寄港したのが、沖縄観光の第一歩だった」と述べているのが、これに当たる。

ハワイの沖縄県人会からの訪問団は、救済物資とともに沖縄を訪れた。その目的は、親族の安否確認と沖縄の真の姿を自分の目で見ることだった。受け入れる沖縄側では、初めての「観光団」として、熱烈に歓迎した。ホワイトビーチに到着した船はシーツ軍政長官や志喜屋孝信知事に出迎えられ、軍楽隊の演奏で歓迎された上、MP護衛付きバスで送迎されたという。

親戚訪問を終えた一行の観光日程では、沖縄の復興を確認するために開学直前の琉球大学や開園したばかりの中城城址公園が訪問先に盛り込まれた。訪問団は救済物資を携え、食料事情も整わない中で、親族安否確認と沖縄の「復興」を確かめるために訪問した。その訪問は、米軍と沖縄の人々が共に推進する施策に沿って、沖縄の住民側が初めて受け入れる団体旅行第一号である「観光」訪問団として受け入れられ、救済・慰問・安否確認という訪問側の意図とは別に、沖縄の「大歓迎」には、その後の観光への足掛かりにしようとする目的が込められていた。

ハワイ沖縄県人会の戦後初の慰問訪問団60名を乗せた、プレジデントラインのゴードン号が勝連村米軍港ホワイトビーチに入港。那覇市歴史博物館提供

二、沖縄ホテル再建

終戦から二年後、定三は区長に選ばれた。真喜屋にある保安林を売って豚に換えたが、伐採を民政府の役人に見つかり、「刑務所に行くことになるぞ」と言われたり、移住した人からは「拝所(ウガンジュ)の木まで切るとはけしからん」と言われたりした。しかし、定三にはここでずっと過ごす気持ちはなかった。早く出て、事業をする気

＊注1
沖縄県系ハワイ2世の比嘉武信がまとめた『新聞から見るハワイ90年の沖縄人　戦後編』ではダラー社の汽船ではなく、アメリカン・プレジデント・ライン社の船と記述されている。

持ちがふつふつと湧き起こっていた。そこに「ライカム(RyCom：Ryukyu Command Headquarters：琉球米軍司令部)の食堂売店を民に移管するからやってみないか」と琉球群島政府の呉我春信経済部長から声がかかった。当時は軍政府のシーツ長官が敷く「シーツ善政」(＊注2)のもと、民間人でもウチナーンチュでも事業のチャンスがある、そんな希望が持てた時代だった。

定三は、真喜屋を出て馬天で会社を組織した。昭和二十四(一九四九)年、戦争が終わって四年がたっていた。ところが、準備を進めている間にシーツ長官は退任し、後任のマクルーアー長官のもとではライカムでの売店を民に移管する計画は引き継がれなかった。定三は大きな借金を抱えることになり、そのまま馬天にあるベイビュー将校クラブで働いて半年たったとき、今度は「ホテルをやらないか」という話が舞い込んだ。琉球映画貿易(映画館、興行なども行った)のこけら落としに本土からタレントを招くが、泊めるホテルがないので「仮にでもいいから作ってくれ」との社長の大城鎌吉氏からの依頼だった。

> 引き受けることにしたものの、一カ月しか余裕はない。そこで急きょ、安里にあるレンガ造りの家を借りた。この建物は、土建会社「金城カンパニー」社長である金城田助氏の住宅兼事務所だった。彼は戦前、沖縄ホテルを作ってくれた人でもある。
>
> 内部改造をして、米軍払い下げのベッドや毛布を入れ、急ごしらえのホテルが出来上がった。
>
> (『私の戦後史・第五集』から)

こうして戦後の沖縄ホテルがスタートした。昭和二十六(一九五一)年六月、定三が三十九歳のときのことである。那覇市大道に戦後沖縄のホテルの歴史の最初のページが開かれた瞬間だった。部屋数は少なかったものの、当初から「ご結婚、お見合い、一家団欒、懇親など」の利用を見込んだ本格的なホテルを志向していた。しかし当時の状況ではまだホテルの需要はわずかなものだった。当初は部屋数の少ない小さな施設ながら、その後は来沖する芸術家、文筆家など著名人が宿泊するホテルとして有名になる。

当時の沖縄では昭和二十三(一九四八)年頃から復興期に入って工事関係者の需要もあり、宿泊施設が建ち始めた。昭和二十三(一九四八)年十月二十九日付け「うるま新報」には浮島ホテル開業の広告が掲載されている。

沖縄の戦後の宿泊業では、主な客層にはまず軍工事を受注した土建業者が多かった。昭和二十五(一九五〇)年に始まった朝鮮戦争はアメリカに沖縄の軍事的利用価値を再認識させた。朝鮮戦争以来、数年間は軍工事ブームがつづいた。

軍工事ブームのあとは、映画館の建設ラッシュに伴い、本土からタレントたちがやって来ては沖縄ホテルに滞在した。有名人から無名の歌手、かつて有名だった歌手まで、どんどん沖縄に送られてきた。当時の沖縄には純粋な旅館は少なく、連れ込み宿ばかりが乱立し、そちらは繁盛して客も多かった。しかし、沖縄に来る観光客はほとんどなく、スタートしたばかりの沖縄ホテルに泊まるのは軍工事の関係者や商売人が中心だった。やればやるほど赤字が出た、という。

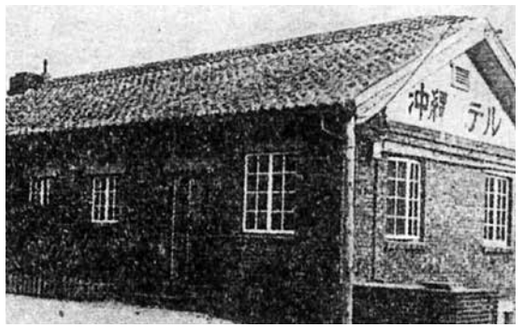
> 今ここで売春宿に変わることは簡単だ。しかし、戦前のことを思えば、意地もあるし、誇りもある。とてもできなかった。だが経営は苦しく、親の財産を売って食いつなぐありさまだった。大城氏の顔を立てて始めたまである。あっさり辞めるか、それともこのまま続けるか。私は悩んだ。
>
> (『私の戦後史・第五集』から)

定三は岐路に立たされていた。ホテル旅館業を生涯の仕事とするのか、やりがいはあるのか、何より食っていけるのか。サンフランシスコ平和条約で日本本土は独立を回復したが、沖縄は切り離されて米軍の支配下に置かれたままだった。当時、沖縄と本土を行き来するにはパスポートが必要だった。観光旅行で沖縄を選んでもらうにはハードルが高すぎた。

この当時のめぼしい旅館ホテルといえば昭和二十三(一九四八)年開業の球陽館、昭和二十七(一九五二)年に開業した琉球ホテル、それに沖縄ホテルくらいだった。

そんなときに、米軍関係者を主な読者とする英文の日刊紙「モーニングスター」に、沖縄のホテル業界を侮辱するような記事が出た。いわく、沖縄の人々は「パーティ民族」で毎晩酒を飲んで騒ぐ。ホテルは泊まると

＊注2
「シーツ善政」では沖縄占領政策を「復興」と「民主化」に転換し、経済援助、社会福祉、公選導入、居住制限の緩和が図られ、沖縄の人たちに歓迎された。



那覇市大道にあったレンガ造りの建物を利用した沖縄ホテル

昭和27(1952)年に開業した琉球ホテルの外観。那覇市歴史博物館提供

ころなのか料理屋なのか慰安所なのか区別できない、と報じられた。

これに定三は義憤を感じ、さっそく末広旅館の仲井間宗吉氏、球陽館の塩浜康盛氏に相談し、五軒の旅館・ホテルで那覇市ホテル旅館組合を設立した。沖縄人の面目にかけて純然たる旅館営業をつづけることを誓い、さらに「那覇市内には正常な営業をしている宿泊業者がいる」という声明を出した。

> わざわざ那覇署まで行って、「売春宿だけが沖縄のホテルではない」と声明を発表。モーニングスター紙に怒りをぶつけたのである。私はこれがきっかけとなって、もう一度この仕事にかけてみようと決心したのだった。
>
> （『私の戦後史・第五集』から）

吹っ切れた定三は、この後、沖縄観光のためにまい進する。いや、定三だけではなかった。偏見や侮蔑への反発が、沖縄の誇りが、人々を奮い立たせたのだった。

三、沖縄観光の黎明と転機―那覇市ホテル旅館組合を設立へ

沖縄観光の歴史をたどれば、琉球商工会議所観光専門委員会の呼びかけで昭和二十九（一九五四）年一月に沖縄観光協会が発足している。発起人には、琉球政府行政主席比嘉秀平をはじめ、那覇市長当間重剛ら行政・経済・文化各方面から重鎮とともに沖縄ホテル社長・宮里定三も名を連ねた。初代会長に当間重剛（那覇市長）、副会長に儀間光裕（沖縄旅行社社長）と親泊政博（琉球新報社社長）、専務理事に与那国（山城）善三、のちにこの協会の後進である「沖縄観光連盟」の会長を務める宮里定三も理事に連なった。

設立早々の四月には旅館・ホテルの経営者が集まり、申し合わせをしている。昭和三十（一九五五）年七月には観光協会指定旅館の認定が行われ、那覇市内で十軒、真和志市内で六軒、名護町内で三軒の計十九軒が協会から看板の配布などを受けている。他にも、協会は、琉球政府に観光課設置を働きかけ（昭和三十六［一九六一］年に経済局内に設置）、バスガイド、旅館従業員、タクシー運転手にサービス講習会を実施し、さらに琉球政府が策定中の経済振興五カ年計画のなかに重要な項目として観光産業を位置づけるように要請し、沖縄産のみやげ品開発も手がけている。

その陳情書のなかで、「孤島経済」がいつまでも基地の恩恵に頼っていては成り立たないこと、観光事業が産業振興だけでなく、沖縄の文化を世界に紹介し、ひいては国際親善に役立つことを指摘している。単なる観光振興にとどまらず、すでに沖縄経済全体とその将来を見据えた戦略がうかがわれる。

沖縄観光協会はその後、昭和三十一（一九五六）年二月に任意団体から社団法人に法人格を変更し、昭和四十三（一九六八）年六月にはその機能を新しく設立された社団法人沖縄観光連盟に譲り、自らは昭和四十七（一九七二）年に那覇市観光協会となる。

昭和三十年代に入ると本土からの訪問客が一万人台になるが、ほとんどが商用であった。そのために、ほとんどの宿泊施設では浴場やトイレの設備も不十分で、観光客を前提にしたサービスにはほど遠いのが実情だった。

この頃沖縄を訪れたハワイ観光団や、沖縄タイムス主催の経済使節団からは「部屋係のサービスが悪い」「料理に変化がない」「衛生施設、とくに水洗便所が不十分」といった感想が寄せられている。

沖縄ホテルでは、商社の支店長が社宅代わりに滞在する例が多かった。昭和二十六（一九五一）年には民間貿易が再開され、その二、三年後から本土の商社が沖縄に進出してきた。沖縄ホテルに住友、三井、東食、日本航空の沖縄支店長が数年単位で滞在していた。

その頃、ホテルに泊まる人たちが聞くのは、戦死した親族や知人のことだった。「何部隊にいたか、知りませんか」「どこそこで戦死したはずだが、場所はどこか」。時代はまだ戦争の余韻をひきずっていた。宿泊客との話題の糸口は、決まって沖縄戦に絡んでいた。戦後の影はまだ深く沖縄を覆っていた。

昭和三十二（一九五七）年には本土のホテル・旅館業界へ宮里定三ら那覇市ホテル旅館組合の十六業者が

昭和30（1955）年頃の日本渡航証明書（左）と検疫証明書（右）。那覇市歴史博物館提供

視察に出かけた。この視察旅行がひとつの転機となった。

行ってみて、グウの音も出なかった。戦火を免れた戦前の旅館が、たくさん並んでいたのである。それに観光客も多い。あまりの差に、私たちのショックは大きかった。

（『私の戦後史・第五集』から）

沖縄戦の惨禍に加え、米軍政下で主権を制限されてきた沖縄と本土とでは復興の速度も状況もまるで違っていた。本土は朝鮮戦争特需を経て空前の好景気がつづき、前年（昭和三十一〔一九五六〕年）に発表された経済白書には「もはや『戦後』ではない」と記され、高度経済成長期を迎えていた。観光旅行とは程遠い沖縄の状況とはまるで比べ物にならなかった。

しかし逆に、この格差ゆえに定三には「沖縄にもいつか観光客の波が必ず押し寄せてくる」という確信が生まれた。だからこそ、今のうちに沖縄の観光の基礎を築かなければならない。定三のなかに芽生えたこの信念が、その生涯をかけた、沖縄観光を発展させていく夢を実現する原動力となっていく。

だが、そうだからといって、組合員が最初からもろ手をあげて賛成したわけではなく、むしろ半信半疑だった。なにしろ、まだ渡航にパスポートが必要だった。この面倒な手続きがいつなくなるのか、まったくわからない。投資をするには、まだ機が熟していなかった。昭和三十四（一九五九）年には正式に「那覇市観光ホテル旅館組合」が設立された。初代組合長には宮里定三が推されて就いた。沖縄観光の夜明けが近づいていた。

昭和三十三（一九五八）年、守礼門が復元され、通貨がB円からドルへ切り替えられた。沖縄の人口は昭和三十（一九五五）年の約八十万人から昭和三十五（一九六〇）年には八十八万人と、一〇％の伸びを見せていた。沖縄経済の「離陸」に向けての滑走はすでに始まっていたといえよう。

そして昭和三十四（一九五九）年には、沖縄への渡航制限が緩和された。この制限緩和は沖縄旅行において、まさに新時代を画することになる。

B円をドルへ切り換えようと交換所に押し寄せる県民。沖縄県公文書館提供

昭和三十六（一九六一）年頃の沖縄ホテル

昭和二十六（一九五一年）に再スタートした沖縄ホテルは、その後、同敷地内に新しいホテルを建てた。沖縄県立公文書館には、昭和三十六（一九六一）年一月に琉球政府が撮影した貴重な写真が残されていた。

写真提供：沖縄県立公文書館

現在もその面影を残すホテル外観

ゆったりとしたベッドが配置された洋室

清潔感あふれる明るく広々としたロビー

落ち着いた雰囲気の和室にはTVも設置

大きな沖縄の地図が飾られたレストラン

カウンターとソファ席のあるバーラウンジ

第三章　本格化する沖縄旅行

昭和三十四(一九五九)年、沖縄タイムス社が文藝春秋社と提携して「文春文化講演会」をはじめた。昭和三十八(一九六三)年には「婦人公論文化講演会」も始まり、多くの作家などの知識人が沖縄を訪れた。この当時すでに本土では「沖縄病」という言葉で沖縄の魅力が語られ始めていた。その火付け役ともなった池島信平「文藝春秋」編集長をはじめとして、井上靖、犬養道子、大佛次郎、大江健三郎、小林秀雄、源氏鶏太、今東光、中村光夫、水上勉、河上徹太郎、瀬戸内晴美、池田弥三郎、石川達三、石原慎太郎など錚々たる作家、評論家が沖縄の地を踏み、その生活や文化に触発された。その多くは沖縄ホテルに投宿した。

この講演会を沖縄タイムス社で担当した牧港篤三氏は詩人でもあり、「沖縄病」と題する詩はその詩集『無償の時代』に収録されている。本土からやってくる知識人たちにとって、沖縄を訪れたことは大きなインパクトを持っており、その後の活動に大きな影響を与えた。と同時に、沖縄が戦中・戦後に抱えていた文化的飢渇をいやしたイベントであった。宮里定三は「私はこの人たちと話していると、沖縄は一人ではない、同胞がたくさんいると勇気づけられたものである」と記している。

本土から沖縄への旅行が本格化するのは昭和三十年代に入ってからで、その背景には昭和三十四(一九五九)年六月から沖縄渡航における外貨制限が緩和されたことが大きい。申請額が一〇〇ドルを越えない場合には、渡航審査連絡会の審査がなくても総理府の認定で許可を得られるようになった。つまり必要書類を整えて各都道府県に提出すればよく、相変わらず米国民政府(USCAR)の許可は必要だったが手続きは大幅に簡素化された。

一、沖縄旅行が本格化した背景

この年には、日本交通公社旅行部長で国内旅行担当の森謙治部長が沖縄を訪問した。本土から沖縄への送客が「外国扱い」から制約が緩和される情勢見込みに加え、観光地として沖縄が有望であることから、今後を見据えた調査のためであった。

当時のJTB新聞十一月十五日号には「新観光地OKINAWA」として記事が掲載され、観光地として「戦没者の霊地巡拝」「南国の風物」「琉球の古典や民芸の鑑賞」と、三つの観点を挙げている。

昭和三十五(一九六〇)年一月には、日本交通公社の京都駅前案内所が京都新聞とタイアップして独自に沖縄への旅行企画を実現させた。戦没者慰霊の「訪問団」としたのは当時の情勢と渡航許可を得るためであったろうが、実際には「観光団」として大歓迎を受けた。空港には民政府主席代理、那覇市長をはじめ大勢が詰めかけ、ブラスバンドが鳴り響き、沖縄美人から花束を受け取るなどの熱烈な歓迎ぶりであった。一行八十六人は四泊五日の日程のなかで、当時話題の映画『八月十五夜の茶屋』のモデルとなった上原栄子が開いた料亭松之下での会食や、「奇跡の1マイル」と呼ばれた国際通りでの舶来品のショッピングを楽しんだ。

沖縄へ行くには「二か月と三時間」かかると言われたのは、外国旅行なみに複雑で時間がかかる渡航手続きと、飛行時間とをあらわした表現で、まだまだ「近くて遠い」島であった。しかも、この京都からの沖縄訪問は航空機利用ということもあって、費用は六万円と高額であった。

同じ昭和三十五(一九六〇)年、十月と十一月の二回にわたって船舶を利用してより低価格の沖縄旅行が日本交通公社によって催行された。それぞれ九泊十日で三万六千円から四万七千円、七泊八日で二万六千円から三万八千円と、航空機利用よりはかなり安価な設定だった。日本交通公社は「三万円の海外旅行」として、強力に売り込んだ。

昭和三十年代はじめの国内旅行ブームで国内観光地が開発し尽くされ、新しい観光地が求められていたなかでの渡航制限の緩和は、沖縄という観光フロンティアを開拓する起爆剤になったといえよう。昭和三十五(一九六〇)

昭和35(1960)年頃の那覇市国際通り・大越百貨店前。沖縄県公文書館提供

昭和38(1963)年頃の那覇市国際通り。沖縄県公文書館提供

年に沖縄を訪れた人は、二万二千人にのぼった。戦後沖縄観光の本格的なはじまりだった。

昭和三十七(一九六二)年、日本交通公社はセット旅行の販売を開始する。今で言うパック旅行のはしりだった。沖縄セット旅行は昭和三十八(一九六三)年から発売され、東京発Aコースが八万六千円、大阪発Bコースが七万五千五百円、博多発Cコースが六万五千円で毎週金曜日発・火曜日帰着の四泊五日であり、年間七百人程度の送客を見込んだ。

まだ航空便は毎日運航していなかった。渡航手続きのために海外旅行業務を行う営業所の協力が必要で、参加者にはクーポンの代わりに航空券と沖縄旅行社宛のバウチャーが渡された。まだまだ沖縄は遠い存在で、気軽に行けるところではなかったが、関係者の努力で観光旅行のデスティネーションへの道を着実に歩み始めていた。

二、慰霊とショッピング

この頃、沖縄を訪問する人々の目的でもっとも多かったのは慰霊参拝だった。二十万人余が犠牲となった沖縄戦で、県外から召集されて沖縄で最期を遂げた日本軍などの関係者は七万人にのぼる。多くの親族や友人らは、沖縄戦の故地で故人を偲ぶことを希望した。

沖縄ツーリストなどの観光業者の対応は、懇切丁寧をきわめた。まだ都道府県や各団体の慰霊碑が建つ前で、ひめゆりの塔の周りには雑草が茂っていた。大型バスも十分になく、道もわからないなかで担当者らは参拝の目的地を調査し、雑草を刈り、未舗装の道路を確認し、花や果物のお供えも準備して案内したという。

付き添った担当者自身もまた戦争犠牲者の遺族でもあり、遺族の気持ちは身にしみて分かっていた。慰霊団ひとりひとりの肉親の最期の地をつきとめては、自ら運転して一緒に回った。同行した遺族からは感謝され、慰霊団が沖縄を去るときには空港で胴上げされるほどであったという。

糸満市摩文仁にある慰霊の塔。手前の駐車場には観光客が利用するバスやタクシーが駐車している。那覇市歴史博物館提供

その後は慰霊碑なども整備されていった。昭和三十八(一九六三)年には慰霊碑・塔の建立がピークに達し、この一年に十三塔が建立された。戦跡や歴史を案内するガイドも養成され、その後も慰霊訪問で多くの人が訪れる下地となった。

同時期、沖縄旅行のおみやげは安く買える舶来品がほとんどを占めた。ショッピング自体が沖縄観光の重要な柱だった。

昭和三十三(一九五八)年から沖縄の通貨はB円からドルに切り替えられ、ドル時代に突入した。本土からの観光客からは外国製のウイスキー、たばこ、香水、時計などが安く買えるショッピング天国としてもてはやされた。当時の外貨持ち出し額制限ぎりぎりまで、こうした舶来品購入に費やすのが普通だった。外貨持ち出し額の制限は、当初の一人当たり二百ドルから昭和三十九(一九六四)年には五百ドルに、さらに昭和四十四(一九六九)年には七百ドルに引き上げられた。昭和四十五(一九七〇)年の統計では、観光客の消費額の六割が土産物代で占められた。

当時の土産物店の盛況はすさまじいほどだったが、本土復帰に際しては対応が問題となった。日本政府に復帰後の対策として免税制度維持継続を要請し、「沖縄の復帰に伴う特別措置に関する法律」によって「観光戻税制度」が導入される。指定品目の購入者はいったん税込み価格で購入し、空港で払い戻しを受けるシステムで、昭和五十二(一九七七)年までの期限付きだったが、延長して継続されつづけ、復帰後三十年目の平成十四(二〇〇二)年に廃止された。すでに円高や輸入関税引き下げでその魅力を失っており、取扱額は激減していた。なお、その代替措置として特定免税店(Tギャラリア・沖縄[那覇市おもろまち]、DFS免税店[那覇空港国内線ターミナルビル])が設置された。

指定物品はウイスキー及びブランデー、腕時計、香水、喫煙用ライター、万年筆、革製ハンドバッグ、身辺用細貨類、さんご及びべっこう製品の八品目で、海洋博が開催された昭和五十(一九七五)年には販売額九十億円、海邦国体開催年の昭和六十二(一九八七)年には九十四億円と最高額を記録したが、酒税法の改正や円高の進行、泡盛との競合、嗜好の変化などで販売額は減少をつづけ、とくに平成に入ってからは激減

糸満市摩文仁にある慰霊碑・黎明之塔。那覇市歴史博物館提供

し、制度が終了する前の平成十三(二〇〇一)年の販売額は二億五千万円余、戻税額で二千万円と最盛期の三%にもみたない状況であった。

戦前に泡盛や紅型、やちむんをはじめとする工芸品が人気のおみやげであったのに対し、占領下の沖縄では舶来品の免税ショッピングが主流となったわけだが、反面、沖縄古来の工芸品や食文化などを観光客向けのおみやげ品に開発する動きは遅れた。そのなかで、黒糖製品や泡盛、紅型、さんごや黒真珠製品、廃ビンを利用した琉球ガラスなどが人気を集めるようになった。

沖縄経済が構造的に自立するためには自前の産業育成が本筋であり、観光業の伸びとともに、伝統的食文化や工芸品からおみやげに適した品目を開発することが必要になる。その過程で、舶来品の免税ショッピングから沖縄固有の特産品へとシフトしていくことは必然であったといえるだろう。

泡盛を例に挙げれば、かつてはウイスキーが人気で、沖縄県民も泡盛よりウイスキーを好む時代が長く続いた。戦争によって泡盛製造業が打撃を受け、戦前の品質を回復するまでに時間がかかったせいもある。しかし、品質の向上の結果、昭和四十九(一九七四)年には「瑞泉」が全国酒類調味食品品評会で、ダイアモンド賞を受賞した。泡盛が品質の上でも全国的に認められるようになり、昭和五十四(一九七九)年に発売された「久米仙」のグリーンボトルが人気になるなど、洋酒全盛だった沖縄県にも変化が生まれ、現在ではおみやげでも主力商品となっている。

三、飛躍への下地

沖縄観光協会が昭和三十七(一九六二)年にまとめた『沖縄観光診断』では、左記のように現状と課題をまとめている。

観光客用にデザインされた泡盛の壺。沖縄県公文書館提供

紅型の反物。沖縄県公文書館提供

復帰前、ドルでショッピングを楽しむ観光客。那覇市歴史博物館提供

(一)観光客三万人、収入七百九十五万ドルは砂糖の千二百七十六万ドルに次ぎ、パイナップルの五百四十四万ドルを凌駕し、貿易外収支として重要な位置を占めている
(二)入域諸手続きが隘路であると同時にドル使用という妙味を持っている
(三)本島に限定されている
(四)熱帯性植物の景観が活用されていない
(五)沖縄特有の文化を伝える建造物が少ない上、博物館もない
(六)宣伝が行き渡っていない
(七)道路、海水浴場、宿泊施設、水族館等の観光施設が充実していない
(八)沖縄戦を伝える記念館すらない
(九)沖縄特有の土産品は観光客向けになっていない

沖縄観光が一大産業となりうる、いやすでになっているという認識は共通のものとなりつつあった。と同時に克服すべき課題がいくつも挙がっている。しかも、道路や施設の整備など、どれをとっても巨額の投資を必要とするものだった。

これらの課題に挙がった交通インフラや諸施設はやがて本土復帰、そして海洋博へとつづく開発の流れの中で実現されていくことになる。たとえばいま、ヤシの木が植えられ、海沿いにつづく国道58号の景観はこうした課題認識を踏まえてデザイン・構想されてできたものである。沖縄観光の現在は、たまたまあった自然や文化をそのまま切り取って提出したものではなく、壮大な意図のもとに計画・構想され、官民一体となった努力が重なってできあがったものである。もちろん、それは順調なものではなく、むしろ危機の連続であったことは、これから記していくことになる。

沖縄観光の前提として、沖縄と本土を結ぶ航空路線は生命線に等しい。昭和二十九(一九五四)年に日本航空の羽田―那覇航路が開かれ(当時は国際線扱いで、開通当初は嘉手納を使用していた)、昭和三十六(一九六一)年には福岡―那覇、大阪―那覇に就航した。

昭和42(1967)年7月1日、南西航空の一番機が那覇空港にて初就航。沖縄県公文書館提供

船では二日かかるが、飛行機なら三時間。空路利用の訪問が増えるのは、時間の問題だった。昭和三十九(一九六四)年には海外旅行が自由化され、昭和四十二(一九六七)年には南西航空(現・日本トランスオーシャン航空)が宮古―那覇、石垣―那覇間で運航を開始した。この年には沖縄への入域旅客数は十万人の大台を突破した。そのうちの九割を観光客が占めるようになり、沖縄旅行は様変わりしていた。宮里定三の回想でも、「昭和四十二、三年頃つまり一九六〇年代後半に入ると、ぼつぼつ〝観光〟という名で沖縄を訪れはじめたのである」と、この時期がエポックを画していたことがわかる。

昭和四十三(一九六八)年十一月に日本交通公社は沖縄本島・石垣島・宮古島の旅館・ホテル二十一軒と旅館券契約を結んだ。各旅館との折衝には、那覇市観光ホテル旅館組合長であった定三が実情を説明したり、あるいは同行して協力し、説得して契約にこぎつけたという。日本交通公社協定旅館連盟沖縄支部の原型は、ここにある。

四、ハワイで得たもの

昭和四十三(一九六八)年十月、米国民政府は沖縄のホテル業者を国民指導員としてハワイ、アメリカへ派遣した。定三を含む四名が選ばれてハワイを訪問したことが、大きな転機となった。

まず、ホノルル空港に降り立った時から違っていた。ムームーを着た娘たちに歓迎され、パイナップルのサービスがあり、荷物を運ぶにも便利、空港につきものの混雑もなく、入国検査も実にスムーズだった。到着してすぐの第一印象は重要だ。ハワイの心のこもった、しかも行き届いた歓迎ぶりは、定三らの胸に印象深く刻まれた。

邦字新聞の「ハワイタイムス」「ハワイ報知」の取材を受け、沖縄観光をPRし、建設中だった「ブセナ海中公園」(復帰前の昭和四十五[一九七〇]年にオープン。世界で二番目の開園だった)を紹介したところ、翌日の新聞には三段抜きで「のびゆく沖縄観光」と掲載された。ハワイには沖縄からの移民も多く、戦後には荒廃した沖縄に種豚五百五十頭を送るなど、物心両面から援助の手を差し伸べてくれた地である。沖縄の復興を我がことのように喜んでくれた読者も多かったはずだ。

定三には忘れられない思い出がある。ハワイ大学で受講中に、教授から「沖縄には年間何人の観光客が訪れるか」と尋ねられたのだ。

この時一瞬、返事を躊躇した。

というのも当時ハワイは約百万人。それに比べ沖縄はハワイの一割もない六万八千人しか来ない。それも観光客だけでなく、沖縄の渡航者全部の数だ。あまりにも少なく、恥ずかしくてとてもまともに答えられなかったのである。しつこく尋ねるし、ここでうそを言ってもはじまらんと素直に言ったが、さすがに声に力が入らなかった。

(『私の戦後史・第五集』から)

百万人と六万八千人。復帰前の統計が整備されていないため、六万八千人という数字がいつのものであるかは不明だが、ひとつの資料によれば、復帰前の沖縄への入域旅客数は昭和四十(一九六五)年に六万二千人、昭和四十一(一九六六)年に八万六千人、昭和四十二(一九六七)年に十一万二千人と順調に増加してはいる。しかし、いずれにせよ、定三が問われて口を開きかねたのももっともな圧倒的な差であった。そして、この体験がその後の活動のエネルギーになったことは間違いない。ハワイ観光をモデルに、いつか追いつく、いや追い越して見せるという負けじ魂に火がついた。

もうひとつ、のちの沖縄観光にとって重要だったのは、「かりゆしウェア」のアイデアがハワイのアロハシャツに触発されて生まれたことであろう。最初の研修の際に講師から「観光の研修なんだからリラックスして受けなさい」とアロハシャツをすすめられ、ハワイでは毎週金曜日は、知事をはじめ官公庁や各企業でもアロハシャツを着る日となっていることを知る。島全体をあげてリゾート気分を作り出し、観光客に気持よく滞在してもらうことを大切にしている。その象徴のひとつがアロハシャツであった。常夏の島には、それにふさわしいファッションがあり、それがハワイらしい独自性を主張し、またみやげ品として産業のひとつにもなっている。

観光関係者でハワイを訪れたときの一枚。

ハワイのメインストリートでオープンカーに乗って沖縄をアピール

沖縄でも、沖縄らしいものができないか？　これが現在のかりゆしウェアに至る発想のスタートであった。ただし、その普及は一筋縄ではいかなかった。かりゆしウエアについては、章を改めてまた触れることになる。

一行はどこまでもつづく舗装道路、大きな駐車場、行き届いた清掃などの設備やメンテナンスに羨望を感じると同時に、観光業に携わる人たちはもちろん、一般の市民ひとりひとりが観光客を大切にする姿勢に感銘を受けた。世界一のリゾート地とうたわれるのには理由があった。単に恵まれた自然や立地条件にあぐらをかいているだけではない。ハワイでの一週間は沖縄から訪れたものにとって、観光とは何かを学ぶ素晴らしい教科書だった。研修旅行はさらにアメリカ本土のロサンゼルス、サンフランシスコ、シアトル、ラスベガスとつづき、沖縄に戻る。持ち帰ったのはおみやげだけではなかった。これからの沖縄観光の道筋が、定三には見えていたに違いない。

五、増え続ける観光客

昭和四十三(一九六八)年には、那覇市三十八業者が集まって「沖縄県観光ホテル旅館協同組合」を結成し、その会長には宮里定三が選ばれた。昭和三十五(一九六〇)年から活動していた「那覇市観光ホテル旅館組合」の組織強化と観光客受け入れ体制の整備を図った。また、この年には「沖縄観光協会」が「沖縄県観光連盟」にかわり、定三は協会長からそのまま連盟会長に就任した。いよいよ、沖縄に観光客が続々とやってくる時代が来ようとしていた。

復帰を二年後に控えた昭和四十五(一九七〇)年頃からは、どんどん観光客が増え続けた。まだ個人客が多く、ツアーは少なかったが「これからは団体が来る」と確信していた定三は、日本観光協会から講師を招いてサービスの勉強を始めており、団体客の受け入れ体制を準備していた。講師を招くだけではなく、従業員らを連れて海外や国内の観光地へ研修旅行を行い、経験を積ませた。

昭和四十六(一九七一)年の「運輸白書」では、復帰後の沖縄観光について「海洋を中心とする亜熱帯自然景観及び沖縄古来の伝統的民俗文化(琉球舞踊、紅型等)を観光魅力とするものに転換する必要があり、特に、観光ルート、観光拠点、輸送手段及び宿泊施設の整備が重要である」と記している。本土のお役所に指摘されるまでもなく、沖縄観光に携わる関係者らはできる限りの体制強化、受け入れ準備に専心していた。

この年(昭和四十六年)には、観光客は二十万人をこえた。定三が予想していたことが、現実になりつつあった。「いよいよ沖縄の観光も春だ」と、復帰のときを待ち構えた。復帰でパスポートが廃止になれば、渡航の面倒な手続きがなくなる。もっと気軽に沖縄に来てもらえる。大衆旅行の時代が、沖縄にやって来る。

定三自身にも、復帰を待ち望む個人的な理由があった。復帰前には渡航者のビザの身元保証人として、年間で一万五千人にも名前を貸していたからだ。なにかあれば米国民政府から呼び出しがくる、そんな煩わしさから解放されるのだ。

昭和四十七(一九七二)年五月十五日、待ち望んだ復帰の日から、沖縄の観光は激変した。続々と観光客が沖縄に押し寄せた。

> 宣伝しなくても、いくらでも来た。どこの宿泊施設もいっぱいになり、うれしい悲鳴を上げた。この年の観光客は四十六万人。前年に比べて、実に一一七％という史上最高の驚異的伸び率を示したのである。やっと、ホテル旅館業界の〝黄金時代〟を迎えたのだった。
>
> (『私の戦後史・第五集』から)

それから、旅館やホテルは資金を投下して本格的な増改築をはじめた。新規に建つ宿泊施設も増え、沖縄県始まって以来のホテル旅館建築ブームとなった。昭和三十二(一九五七)年に、本土へ視察旅行に出かけて「グウの音も出ない」ほど本土との差にショックを受けてから十五年。「だがいつかはこの観光客が沖縄にも押し寄せてくる」という確信が間違っていなかったことが、ついに証明された。

その後も観光客は増え続けた。まさにうなぎのぼりで増えつづけ、沖縄国際海洋博覧会の年である昭和五十(一九七五)年を迎える。そしてこの絶頂のときに落とし穴が待ち受けていた。

車上でにこやかに手を振るミス沖縄と宮里定三氏

第四章　「海洋博」がもらたしたもの

沖縄国際海洋博覧会開幕直前の状況を見てみよう。当時すでに沖縄県の観光収入はパイナップルを上回って砂糖に迫っており、産業の柱となる規模に成長していた。この当時はまだ基地関係収入が圧倒的に多く、基地依存経済を脱しているわけではなかったが、沖縄経済自立へ向けて観光産業にかける期待は大きくなっていた。ただ、一部には製造業などの「本業」で経済振興を図るのが本来であり、観光業はそれまでの「つなぎ産業」でしかない、との見方もあった。今となれば「観光軽視」と問題視される考え方だが、当時の沖縄観光「ブーム」の内実を見れば、観光業がそのまま成長しつづける見通しはそんなに明るいものではなかった。

復帰前の沖縄観光は、慰霊参拝と舶来品ショッピングが主目的であった。しかし戦跡訪問はいずれひと段落するであろうし、復帰して税制が変われば免税特典をはじめ安く買えるメリットがどうなるかは不透明だった。この二つに代わる、沖縄に人をひきつけるものは何なのか？　沖縄観光に突きつけられた命題は重かった。

一、沖縄観光の方向性を模索する

昭和四十四(一九六九)年に開かれた、観光関係者による座談会「観光産業開発へのビジョン」(＊注1)では、当時の現状を自然発生的なブームのようなものととらえていた出席者が多かったようだ。施設やサービスは不十分で、満足しないまま観光客が帰っていく状況がつづけば、いずれブームが過ぎ去ったときにはどうなってしまうのか？　そうした不安に対して、どんなビジョンを持てばいいのか、模索はつづいた。

まず、めざすべきモデルとしてはハワイが意識されていた。個別に挙げられた沖縄観光の課題は次のようなものである。

◎沖縄の特産品には紅型や陶器があるが、高価。子供向けもない。
◎名物料理がほしい。
◎沖縄の人情は厚いと言われるが、タクシーなどの不親切さは反感を買っている。
◎南国のイメージとしてヤシの木はどうしても植える必要がある。
◎ハワイのフラダンスのような代表的な舞踊が必要である。
◎観光施設の整備。海中展望塔・沖縄文化村・水族館・国民宿舎などは計画が進んでいる。
◎ビーチは自然のままではなく、ハワイ同様整備さえすれば魅力が生まれる(＊注2)。

他にも歓迎ムードをつくる、リピーター確保のためにゆったりとした日程をつくる、交通費が高いから大型船舶の導入を、ハワイのアロハやムームーのような服を考案すれば産業育成にもなる、観光業を担う人材育成を、亜熱帯植物のような宣伝の切り札を、などの課題も挙げられている。

こうして見ればわかる通り、実はこれらのアイデアのほとんどは現在、実現している。というよりは、沖縄といえば思い浮かべる青い海、白い砂浜、海岸線に沿って走る道路、そこかしこに立つヤシ並木などの亜熱帯植物、国際通りのおみやげ屋に並ぶシーサーの焼き物や紅型のコースター、各種のおみやげ、沖縄そば、ゴーヤーチャンプルー、ラフテー、泡盛、紅芋、海ぶどう、塩をはじめとする「沖縄らしい」食文化、それらを活かした菓子製品、エイサー、琉球舞踊、三線、かりゆしウエア、「イチャリバチョーデー」に代表される沖縄独特のホスピタリティ、観光客数の八割をこえたリピーター、安くなった飛行機やパックツアー……そういった、今では定番である既成の沖縄イメージ、あるいは常識がここでは「これから実現すべき課題」として列挙されている。

ここから分かることは、現在私たちが享受している沖縄観光の前提ともなっているこれらのイメージ基盤は、実は自然に出来上がったものではなく、沖縄の観光関係者がビジョンにもとづいて作り上げてきたものだった、

＊注1
「観光産業開発へのビジョン　関係者をかこむ座談会」(『沖縄生産性』1969年6月号12-20頁。座談会のメンバー：友利寛造・琉球政府通産局観光課企画宣伝係長、渡名喜守定・沖縄観光開発事業団理事長、高良一・沖縄観光連盟会長、東良恒・沖縄ツーリスト社長、宮里定三・沖縄ホテル社長、宮里辰彦・リウボウ(百貨店)社長、山城新好・琉球大学教授)

＊注2
あまり知られていないが、たとえばオアフ島のワイキキビーチは人工ビーチである。

ということである。

「現在では自明な環境と化したこれらの〈観光資源〉が、60年代の沖縄観光ブームの時点では、ほとんど欠落し、開発されていなかったということである。裏返せば、これらの〈観光資源〉は、「昔からあった」沖縄固有のものに見えるが、実は70年代以降の30年の間に開発され、人為的に創り出された新しいものだ」という社会学者・多田治(『沖縄イメージの誕生』東洋経済新報社、二〇〇四年)の指摘は鋭い。

しかし、こうしたビジョンを実現するには資金の問題があった。沖縄の地元業者を育成するような政府による長期融資はできるのか、本土資本が参入してくるのではないか、不安はつきなかった。

当時すでに世界第二位のGNPを誇るまでになっていた日本本土と、長い米軍占領下で弱体だった沖縄経済の差は大きく、沖縄の地場産業は危機が予想された。

昭和四十七(一九七二)年五月十五日。沖縄は日本に復帰した。この年の観光客数は四十四万人と倍増した。海洋博への期待は高まっていたが、同時に問題点もあらわになってきた。

二、宿泊施設乱立の危機

最初の問題は、宿泊施設が乱立しはしないか、ということだった。海洋博開催決定以来、ホテル旅館建築ブームに拍車がかかり、放置すれば共倒れする危険性が高かった。宮里定三ら観光関係者が「宿泊施設の適正規模を設定すべきだ」と県に訴えても、海洋博の成功しか考えておらず、地元企業の死活にはおかまいなしのような態度であった。一方では毎日四万人が訪れるという予想もあり、国や県は宿泊施設の建築予定業者への融資など、どんどんつくれとばかりに資金が供給された。

今、ここで立ち上がらなければ取り返しがつかない。とどまることを知らない建設ラッシュに対して、定三をはじめとした県内の約三七〇の宿泊業者が集まって「沖縄県旅館環境衛生同業組合」を結成し、会長となった

昭和47(1972)年5月15日、沖縄県主催新沖縄県発足式典、那覇市民会館にて。沖縄県公文書館提供

定三をはじめ同業者がひとつにまとまって危機への対策を講じた。宿泊施設が無制限に進出することに関して何の規制もしない国や県の無策に対し、建設予定者への説得を行い、建設反対の集会を開き、「ムードに流されるな」「わずか半年の開催期間では投資は回収できない」「共倒れの危険がある」と訴えた。

沖縄観光のために正しいと信じることを、徹に貫く定三のリーダーシップは、このような死活の危機の際に発揮された。しかし、海洋博に乗じて宿泊施設を建てようとする人々の反応はさまざまだった。

> ムードに浮かれて、全く耳を貸さない人がいる。「業者のエゴだ」と非難する者もいる。また「海洋博を成功させるためには、一億円くらいの損は覚悟の上だ」と、薬のつけようがないのもあった。しかしなかには半信半疑ながら、バラ色の夢を途中で捨てた人も何人かいた。
>
> (『私の戦後史・第五集』から)

その頃、琉球銀行調査部が海洋博時における県内の宿泊適正室数を推定し「八千四百室(約二万七千人収容)」と発表した。ところが、昭和五十(一九七五)年六月には沖縄の宿泊施設の収容人数は、三万四千人にまでのぼっていた。推定された適正規模のちょうど倍に当たる。

さらにまた問題が起きた。新設の中小ホテルが「この際もうけてやれ」と二万円台もの法外な宿泊料金をつけ、旅行社とのトラブルも起きた。観光連盟の指導力を問う声まで出て、苦情が定三にまで来た。

> このまま放っておけば、沖縄の観光はだめになる。沖縄の恥だ。新規業者を戒めるために、また観光客を守るためにも、標準料金を設定しようということになった。
>
> (『私の戦後史・第五集』から)

旅行社からの声もあり、那覇市観光ホテル旅館事業協同組合の理事会に旅行社も加わって「一人一泊二食、七~八千円」が適当ではないか、ということになった。しかし、これが「協定料金は独占禁止法違反になる」と沖縄総合事務局公正取引室から問題視され、「協定」を破棄せよと勧告された。組合は強制立ち入り捜査

を受け、理事や旅行社まで取り調べられた。

私には、始末書を書けと言って来た。冗談じゃない。標準料金という形で各ホテルにガイドラインを示したに過ぎず、断じて協定ではない。「これが悪いことか。（始末書は）書かん」と、真っ向うから食ってかかった。

（『私の戦後史・第五集』から）

沖縄の観光のために正しいと信じたら、最後まで一徹を通してまげない。まさに宮里定三の面目躍如だが、とうとう東京の公正取引委員会も調査に入り、呼び出しが来た。それでも謝ることも標準料金を破棄する気もなく、裁判で争うつもりで強気に出た。当時を知る人によれば、このとき定三は収監されることまで覚悟していたようである。

対立は三か月つづいた。定三は「沖縄観光の将来のことを考えて設定した料金だ。絶対に破棄しない」と信念をまげなかったが、全国旅館生活衛生同業組合連合会の会長からの助言もあり、罰則なし、標準料金設定の破棄で決着した。

私は今でもあの時のことは後悔していない。もし標準料金を作っていなければ、宿泊業界はめちゃめちゃになっていただろう。また評判も落とし、現在のように観光客が来てくれたかどうか疑問である。

（『私の戦後史・第五集』から）

三、海洋博開幕とその後遺症

昭和五十（一九七五）年七月、沖縄国際海洋博覧会が開幕した。入場者数の目標は四百五十万人だったが、実際には三百四十九万人にとどまり、海洋博を当て込んだ業者にとっては当てが外れた格好となった。適正規模をはるかにこえていた宿泊施設では、影響が大きかった。とくに「座っていても客が来る」と手はずを整えていなかった新設中小ホテルでは、開催期間中から閉鎖や倒産が続出した。大手でもモトブシーサイドプラザや沖縄ビッグマート協会などが経営破綻し、なかには「起爆剤でなく、自爆剤」と自嘲する声も出るほどだった。

この年、沖縄への観光客数は空前の百五十六万人に膨れ上がった。しかし、海洋博自体の経済効果はむしろ限定的で、その後の反動不況の方が圧倒的な印象を残した。

当時の沖縄ではパック旅行への無理解もあった。旅行社との取引やパック旅行の扱いでも、沖縄側には知識や経験が乏しく、トラブルが多かった。宿泊施設側には旅行社に手数料を支払う慣習がなかったり、複数の旅行社と大量に契約してオーバーブッキングに陥ったりという事例もあったという。また、パッケージ旅行になじみがない人が、一般のみならず観光業界にも多かった。空港に着いた旅行客を旅行社が団体バスで送迎するさまを客待ちしていたタクシーが見て憤慨し、旅行社を目の敵にするような事態が発生した。「パック旅行は空港で解散させろ」「旅行社は海洋博の敵である」などという新聞報道まで出て、関係者は説明に追われた。旅行社が観光客を誘客して観光がはじめて成り立つのであり、観光業界は旅行社と協力するべきであるという正論が理解されるまでは時間がかかり、定三らは行政や報道の関係者に言葉を尽くして、旅行社が送客するシステムを説明したという。

第一次オイルショック直後の経済状況を考えれば、この入場者数はよく健闘したという見方もあるだろう。しかし、復帰まもない沖縄は本土との経済的・社会的摩擦への免疫がなかった。「入場者数五百万人」という数字に舞い上がり、本土から五百万人が沖縄を訪れると思い込んだ人もいた。実際には本土からの「外客」は百六十万人程度と見積もられており、実数に近かった。また、海洋博後の落ち込みも当初から語られていたことだったが、実際に「冬の時代」が到来するまでは、誰も現実味をもって受け止めようとはしていなかったようだ。

一方、組合所属のホテル旅館は黒字であった。旅行社との提携、共同宣伝、受け入れ態勢の充実など、準備が万全だったからである。これも定三の指導力あってこそだった。しかし、その後に大変な事態が待っていた。

昭和50（1975）年、本部町にて沖縄国際海洋博覧会開催。那覇市歴史博物館提供

昭和49（1974）年7月、那覇空港にて海洋博PR団出発式の様子。沖縄県公文書館提供

四、旅館ホテル業界の苦境

海洋博のお祭り騒ぎが終わると厳しい現実が待っていた。翌年の昭和五十一(一九七六)年の観光客数は八十三万人に落ち込み、ホテル旅館の客室稼働率は二十%を割る事態に陥った。一部のホテルは病院やマンションに改装し、転業した。旅館ホテルの従業員は海洋博期間中の六割以下に減少し、稼働率十%以下の業者が半数近くにのぼるという調査結果(県観光振興局による本島内宿泊施設を対象にした調査)も出た。

観光業界だけでなく、沖縄経済全体が「ポスト海洋博」不況の波にさらされた。地価高騰、労賃や資材の値上がり、エキスポ価格とインフレばかりが加速し、「海洋博さえ始まれば……」の期待ははずれ、景気は開催期間の後半からすでに落ち込みはじめていた。

県は昭和五十(一九七五)年十一月に救済策として、十七億五千万円の特別融資枠を設定した。この年の倒産件数は九十一件、翌五十一(一九七六)年には県内の倒産件数は百五十三件と過去最高にのぼった。こうした倒産ラッシュには、復帰後まもなくの沖縄には、まだ経済面での経験が乏しかったことも影響している。たとえば手形の知識がなかった、企業競争にさらされたことがないため本土企業に受注を奪われた、経営者の見通しや判断が甘かった、など。過剰な設備投資、稼働率の低下、売上不振などの経営悪化の原因も結局はこうした経験不足に起因した。失業率は七%に達する勢いになり、沖縄経済は危機に瀕した。

こうして海洋博は倒産、失業を引き起こして終わった。しかし、海洋博が残したのは、こうした後遺症だけではなかった。道路をはじめとするインフラ整備など、その後の沖縄にとって重要な遺産もまた残したのである。

海洋博後遺症がもっとも早く、厳しい形で現実となったのはホテルや旅館であった。定三の沖縄ホテルも六千万円の赤字を出した。海洋博での黒字を上回る数字であった。

定三が理事長をつとめる沖縄県旅館環境衛生同業組合で行ったアンケートでは、回答した二百二十軒のうち、「あなたは今後も経営を維持していけますか。」の質問にイイエ：九十二軒と、半数近くが経営困難を訴えている。他の項目でも

「転業の希望がありますか。」ハイ：九十七軒

「宿泊施設を売却したいですか。」ハイ：九十三軒

「宿泊施設の廃業希望がありますか。」ハイ：九十九軒

と、約半数が転業や宿泊施設の売却、宿泊業の廃業を考えており、当時の苦境がいかにすさまじかったかを物語っている。他の質問でも、借入金の条件変更や延長ができずにいる窮状が見て取れる。

早くも海洋博"後遺症"
きょうから"失業"
不況の中 どうしたらいい
臨時雇用の運転手ら
ホテルもガラ空き

昭和51(1976)年1月19日付、沖縄タイムス社提供

ともかくも、この危機を早く突破しようと、あらゆる手を打った。観光連盟も乗り出して、海洋博事業団に会場の一部を開けてもらった。が効果はなく、半年も続かなかった。

特別に委員会も作って、国や県、市町村、金融機関に陳情して歩いた。しかし、これといった解決策は一つもない。四面楚歌。私たちは窮地に追い込まれたのである。

(『私の戦後史・第五集』から)

こうした危機に、沖縄県旅館環境衛生同業組合は国や県、金融機関などの関係各所に「宿泊施設の救済措置に関する陳情について」を提出した。その内容は、余剰宿泊施設の買い上げ、転業奨励金の支給、廃業保証金制度の制定、金融機関からの借入利息への国からの補填、返済の据え置き、運転資金の貸出、固定資産税や償却資産税の減免など主に金融支援を中心にしていた。

定三らは各所に陳情し精力的に活動し、昭和五十二(一九七七)年四月四日には、衆議院沖縄問題特別委員会に証人として出席した。

しかし、陳情のなかで実現したのは借入期間の延長くらいで、あとは各ホテル旅館の経営状況に応じた資金手当てや運転資金、または転業に必要な資金には沖縄公庫の生業資金を活用することが決まった程度であり、観光業界を包括的に援助するものではなかった。経営困難に陥った宿泊施設は、淘汰されるに任された。一方、「自分たちで沖縄に客を呼ぼう!」とはじまった誘客作戦の効果もあり、状況は少しずつ好転していく。

五、誘客作戦

「国や県はあてにならん」。定三らは、自分たちが努力するしかない、と腹をくくった。いったいどうしたらいいのか、考えぬいた末に辿り着いた結論はシンプルだった。「一人でも多く、沖縄に観光客を呼ぶしかない。そのためには日本全国にキャラバン隊を派遣して、宣伝をしよう」。背水の陣の決意だった。

観光に携わる人たち、おみやげ品店協会、観光施設、バス会社をはじめとする面々が協力して立ち上がった。沖縄県も積極的な誘致策を打ち出した。航空会社、旅行社もキャンペーンを行った。官民が一体となって、強力な誘客作戦が動き出した。

なかでも沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合が、日本交通公社協定旅館連盟沖縄支部の協力で東北三県を回った「沖縄観光宣伝隊」は、百名あまりの団員が赤いハイビスカスをデザインした「おきなわシャツ」(のちの「かりゆしウェア」)を着て、日本唯一の亜熱帯リゾートをアピールした。冬の寒さが厳しい地方だけに、避寒を兼ねた旅行先として沖縄は人気の観光地となり、訪問増加につながった。

「沖縄観光の苦しみから脱却するには、自分が先頭に立たなければだめだ」と、定三は率先して行政などの関係機関に信念を述べて対策を要請した。その後にめざましく発展する沖縄観光の基盤をこの苦難の時期に築けたのは、つねに観光業界をリードした定三の存在があってこそだった。観光に関する委員会で定三が出席する場合としない場合では、委員会の雰囲気がガラッと変わったという。それほど、定三の存在感は大きく、重みを持っていた。

定三はまさに全身全霊で打ち込んだ。「この時ほど私の全ファイトを燃やしたことはなかった。三度の飯より好きなゴルフも、ピシャリとやめた」と回想している。

昭和五十一(一九七六)年九月に最初のキャラバン隊が出発した。最初は駅前で配ったビラを半分以上その場で捨てられたりしたが、次第に要領をつかんで黒砂糖や星砂をパンフレットにつけて成功した。

金はかかるが、必ず持って帰ってくれるはずだ。試しに仙台の駅前で配ってみた。捨てる人は一人もいない。「しめた。やったぞ」私はひそかに快哉を叫んだのである。

(『私の戦後史・第五集』から)

本土の旅行業者も、沖縄の宣伝不足を指摘した。沖縄のよさ、とくに海を生かすことでもっと客を呼べるのではないか。「海洋博を売って、沖縄を売らなかった」などの批判もあった。人工ビーチをつくってのんびり

全旅連全国大会で沖縄への誘客を呼びかける関係者たち

海洋博後、初の船での大型観光団歓迎式(1977年)

海水浴ができるようにする。本島だけでなく、離島も含めて商品開発をする。沖縄で観光に携わる関係者はこうした声を聞きながら、積極的に本土へ出かけてキャンペーンを展開した。

レジャー記者クラブからの情報を聞いて作戦を立てる。大会があれば、琉球舞踊と泡盛を持って沖縄を宣伝する。旅行社に出向いたり、逆に旅行社を集めたり、さまざまな方法で誘客活動を繰り広げた。

当時は予算がなくて、自腹でキャラバン隊に行っていたとも聞く。それだけ、「沖縄観光を何とかしなくては」という使命感は熱かった。

六、飛躍

こうした沖縄キャンペーンは、いわば「非常事態」への対応として出発したが、同時に観光業に携わる人たちの結束を強め、「官民一体」を掛け声だけでなく実体化し、本土の旅行業者とのつながりを強める働きをした。その後も沖縄観光の歴史のなかで危機に何度か出会うことになるが、そのたびに復活することができた要因のひとつに、この時期の経験と交流の積み重ねをあげることができるだろう。

海洋博後、昭和五十一(一九七六)年から昭和五十三(一九七八)年にかけて、沖縄への観光客数は八十三万人から百五十万人へと急成長した。ついに昭和五十四(一九七九)年には百七十七万人と、海洋博のあった昭和五十(一九七五)年の観光客数を上回った。

この躍進の原動力の最たるものは、もちろん沖縄観光関係者の努力であったろうが、他に契機となったものがいくつか考えられる。

各航空会社が行った沖縄キャンペーンの効果も大きかった。昭和五十二(一九七七)年からGIT運賃(団体包括旅行割引運賃)が沖縄線に導入されたことから、日本航空(JAL)・全日空(ANA)とも積極的な姿勢をとった。ジャンボジェット機をはじめとする機材の大型化は航空運賃の低廉化をもたらし、大量

祝賀会で挨拶をする宮里定三氏

藍綬褒章の授章式前、夫人と一緒に記念撮影

輸送能力を手にした航空会社をディスティネーション開発に向かわせた。その最たる目的地は北海道と沖縄だった。

昭和四十七(一九七二)年から全日空は「キラキラ沖縄：珊瑚礁のハネムーン」として沖縄路線をアピールしてきたが、昭和五十二(一九七七)年にJALの「Let's kiss the sun」、ANA「おぉきぃなぁワッ」と本格的な沖縄キャンペーンが始まった。以後、両社のキャンペーンは沖縄への誘客と同時に沖縄イメージを浸透させていく上で、大きな役割を果たしていくことになる。とくに初期にあたるこの時期には「青い海、白い砂浜、ビキニの女性」という典型的な沖縄イメージの醸成が意図されている。

他にもいくつもの要因が複合していた。たとえば離島観光。石垣島をはじめ、手つかずの自然や沖縄らしい風景は、本島で開かれた海洋博では見過ごされていたものだった。まだまだ観光資源が、自分たちのそばに眠っていることを、沖縄の人々は気づきはじめていた。

沖縄には、時間に余裕がある大学生がやって来た。宮崎県から新婚旅行のメッカの座を奪い、続々と新婚カップルが訪れた。オフシーズンの冬でも、「暖かい沖縄で新年を」過ごそうと年末年始には満室になるほどだった。昭和五十二(一九七七)年は戦没者の多くが三十三回忌にあたり、慰霊の訪問者も多かった。こうしたいくつかの要素は「追い風」ともみえるが、実はそのかげに関係者の努力があってこそ「風」をつかまえることができたのである。

地道な修練も怠らなかった。日本交通公社協定旅館連盟沖縄支部ではサービス講習会に昭和四十八(一九七三)年から取り組み、昭和五十三(一九七八)年からは定期的なサービス講習会を実施している。なかには三回も講習に出席した熱心な従業員もいた。

海洋博ショックからわずかの間にV字回復を成し遂げた原動力は、定三の強力なリーダーシップとともに、こうした観光業に携わる人、ひとりひとりの熱意と努力の成果でもあった。

昭和五十三(一九七八)年、「沖縄国際海洋博覧会の成功と、沖縄観光の振興に尽力した功績」に対し、宮里定三に藍綬褒章が授けられた。この受章祝賀会には多くの関係者が参加して、盛大に受章を祝った。

祝賀会には多くの来賓・関係者が訪れ、盛大に受章を祝った

第五章　さらなる飛躍へ

沖縄観光宣伝キャラバン隊の成功は、沖縄観光にとって大きな自信になった。これからは、時節に乗るだけのなりゆきまかせや、自然にあるものをそのままではだめだ。自分たちで観光資源を開発し、観光客を呼び寄せる努力をしなければならない。慰霊参拝や免税品ショッピング、海洋博といった自分たちで努力して獲得したわけではない要素によって、自然発生的に観光客がやってくるのを当てにしてはいられないことを、海洋博後の反動不況で身にしみて感じたからこその、立脚点であった。宣伝の必要性を認識し、沖縄にある観光資源を生かして観光需要を喚起することが沖縄観光の主たる方向性となっていくことになる。

海洋博後の沖縄観光が飛躍した背景にあるそうした内実を見ていくことで、戦後の沖縄観光の大きな流れを読み解くことができるのではないだろうか。

一、観光沖縄への基盤づくり

昭和五十一(一九七六)年、沖縄県は「沖縄県観光開発基本計画」を策定した。そのなかで挙げられた五つの課題は

◎県民のコンセンサスが十分でない
◎観光開発を進める体制が整っていない
◎観光基盤施設が未整備(とくに離島)
◎海洋性レクリエーション施設が未整備
◎観光関連部門が不十分(サービス施設、食品関係、人材育成)

であった。

この計画に基づき、観光道路や休憩所・トイレ、海水浴場十九か所、キャンプ場・青少年旅行村が二十二か所整備された。こうした行政主導のインフラ整備とともに、沖縄観光の方向性に大きな影響を与えたのが、沖縄県リゾート開発公社の委託により電通が提唱した「ファンタジア沖縄」であった。

この誘客キャンペーンのなかで、県民の意識改革は、県民が観光客を客として見るのではなく、県民が沖縄の歴史・文化を理解して誇りを持てば、観光客をあたたかく迎える効果を生む、と位置づけられた。そのためには「沖縄の歴史」の開発が必要だとうたった。その理由は沖縄にあるような自然、南国らしい雰囲気は沖縄だけのものではなく、しかも沖縄ではそうした自然を観光客が享受する施設・環境が整っていないので、いまはむしろ沖縄の豊かな歴史に素材をとった観光開発を主とし、沖縄の自然は結果として体験するような形を提案した。たとえば遺跡や城跡、民謡や祭り、イベントなど、本土とは大きく異なった沖縄の歴史から生まれた固有のファクターを活用していく。その施策として、沖縄県民に「観光県沖縄の県民として、沖縄の歴史と文化にはぐくまれた沖縄のよさを考え、あわせて『沖縄の心』を再認識させること」を、対策の柱とした。

こうして、沖縄の歴史、文化を観光沖縄のイメージづくりに合わせて再構成し、県民は沖縄をより深く知ることで沖縄を訪れる観光客へのあたたかいおもてなしの心が育まれる――それが、このキャンペーンの狙いだった。そのもくろみが成功したかはともかく、県民にある程度の意識変革をもたらす効果はあったようである。

もっとも大事な観光客への訴求は、どのようなものだったろうか。この時期、沖縄への観光客でもっとも多い層は全国的傾向と同様に学生や新婚カップルなど二十代だった。「ディスカバー・ジャパン」の成功にならい、この若者層への訴求で重要な因子は「自分がその場の主人公でありたい」という欲求である、とした。

観光のなかで、単に景色を見るだけの存在で終わるのではなく、その風景と関わりを作り出し、参加できるような意味付けが必要であり、沖縄の自然・歴史・文化のなかで何かを自分で発見する(ディスカバー)演出によって観光客は自分だけの物語を作り上げていく。

このように練り上げられたコンセプトは「ファンタジア沖縄」と名付けられた。まさに沖縄版の「ディスカバー・ジャパン」に相当するもので、こうしたイメージ戦略は、やがて現実の沖縄を覆っていくことになる。

自然の断崖を利用した、優雅な曲線が美しい勝連城跡。©OCVB

県民だけでなく多くの観光客も魅了する那覇大綱挽き。©OCVB

二、県民を巻き込んだイメージ戦略

この提言をそのままではないにせよ、それなりに影響を受けた形で沖縄観光の振興策はすすめられた。沖縄県は新設した観光振興局を中心に、沖縄観光を売り込む施策を展開していく。

観光宣伝隊を本土に派遣し、修学旅行やコンベンション・ツアーの誘致を精力的にすすめ、タクシー運転手への観光客への言葉づかいの講習会も行われた。また、県から日本交通公社に対して大がかりな沖縄キャンペーンを要望した。

沖縄県経営者協会の青年経営者部会は昭和五十一(一九七六)年十二月の「沖縄県観光振興への提言―当面の危機を乗り切るために―」で、「新しいメンソーレ運動の展開」を標榜した。全県民が「メンソーレ」のあいさつに象徴されるあたたかい心で観光客を包み込み、国際観光地として明るいイメージづくりを全員参加でしようというもので、こうした沖縄県民を挙げて沖縄観光に資するという視点は、先の提言とも共通するものであり、また「明るい沖縄」というイメージを先行させて現実をそのイメージに適合させていくという方向性もまた共有されている。

観光関係者の努力により、観光振興を媒介にして県民の意識改革は一定のベクトルは持ち得たものの、実際に県民自身が自分の問題として観光振興を考えるに至ったのは、平成十三(二〇〇一)年の9・11テロによって沖縄観光が冷え込んだ危機においてだった。これについては次章で記すことになる。

前章でも触れたように、海洋博後の沖縄への観光客数の回復の要因のひとつには離島ブームがあった。海洋博前から慶良間諸島や八重山諸島の石垣島・竹富島・西表島などが学生などの若者を中心に人気になっており、海洋博の昭和五十(一九七五)年には観光客数は横ばいだったものの、昭和五十一(一九七六)年には八重山は海洋博ショックに呻吟する本島とは逆に観光客ラッシュに湧いていた。むしろ、海洋博の混雑を嫌ってこの年に集中したフシもある。とくに竹富島には復帰後から若者を中心に観光客が増え、さらに小浜島にリゾートホテルはいむるぶし(昭和五十四年開業)ができると、八重山地域は新婚旅行に人気の滞在先となっていく。昭和五十一(一九七六)年の八月には沖縄県全体への入域観光客数はひと月で十二万人に達し、この時点でどうにか危機的な状況からは脱している。

こうしたなか、観光ビジネスの成長にともなって、もっと沖縄の歴史・文化を観光に生かしていこうという声があ

親泊康晴那覇市長(右から2番目)と一緒に観光週間をアピール

がってきた。それは観光客が沖縄の表面的な部分だけを見ることへの不満表明でもあった。こうした主張に沿うように、エイサーやハーリーをはじめとする伝統行事や民謡、陶器、織物などの文化・工芸、さらに農産品や水産品、食文化に至るまでも観光に活用され、ブランド化がすすめられ、沖縄らしいイメージを強化することにつながっていく。

工芸品では琉球絣、紅型、読谷山花織、喜如嘉の芭蕉布、宮古上布、久米島紬、八重山ミンサー織、壺屋焼、琉球漆器などが続々と伝統工芸に指定され、伝統復興の動きにつながった。さらに戦後さかんになった琉球ガラスや、金細工、月桃紙、琉球藍など。また、さとうきび、ゴーヤー、マンゴー、パパイヤ、紅芋、もずく、海ぶどう、石垣牛といった肉牛などの農水産品に加え、沖縄そばやサーターアンダギー、ちんすこう、黒糖、豆腐蓉、泡盛などをはじめとするさまざまな食文化も観光振興に一役買うことになる。

こうして列挙することでも分かる通り、これらの「県産品」は観光客に向けたおみやげ品として開発されており、さらに現在では塩や健康食品、三線やタコライスなども人気となっている。

三、さまざまな誘客の動き

前章でも述べたようにGIT運賃(団体包括旅行割引運賃)導入にともなう全日空と日本航空の本格的な沖縄キャンペーンは、沖縄観光を加速させた大きな要因となり、「夏」「海」「亜熱帯」「ビキニ」というキーワードで想起されるような典型的な沖縄イメージを全国に一気に普及させた。沖縄という日本でありながら日本でない「南の楽園」を象徴的に表現したのは、白い砂浜に映える魅力的なモデルであり、沖縄に観光客をひきつける磁力さえ発していた。

時代が新しくなるにしたがい、夏を前面に押し出したキャンペーンから「何もしない贅沢」へ、若者中心から大人への訴求へと移行していく。こうした流れは、沖縄のリゾート化の流れとも一致している。

国内での観光交流も見てみよう。宮里定三は「夏は沖縄、冬は北海道」とつねづね北海道と沖縄の協力関係を重視していた。昭和五十二(一九七七)年に北海道に観光宣伝隊を派遣して以来、北海道と沖縄の観光関係

糸芭蕉から採取した繊維を使って織られる芭蕉布

14〜15世紀頃、中国から伝えられた漆工技法が発達した琉球漆器

沖縄を代表する伝統的な染色技法の一つである紅型

多彩な柄が魅力の琉球絣は、日本の絣のルーツとも言われる

者の交流がすすみ、昭和五十三(一九七八)年の雪まつりに沖縄の雪像をつくって沖縄を宣伝する企画が生まれた。スポンサー探しの苦労や自衛隊による雪像建設への反対などの難問を乗り越え、北海道の沖縄県人会の協力もあって「守礼門」がさっぽろ雪まつりに堂々たる姿を見せた。これを契機に昭和五十四(一九七九)年には沖縄県観光連盟と札幌観光協会が姉妹提携し、現在も観光交流がつづいている。この提携は利害をこえて幅広い人脈をもつ定三の存在があってのことだった。

日本交通公社は昭和五十四(一九七九)年の一月から四月にかけて「ほほえむ沖縄」をキャッチフレーズとする「沖縄ワイドセール」キャンペーンを実施し、目標に五千人上乗せした九万五千人の集客を達成した。この成功に対して沖縄県の西銘順治知事から日本交通公社の長瀬恒雄社長に感謝状と記念品が贈られ、これを知事に代わって手渡す役を定三が果たしている。

昭和五十四(一九七九)年にはもうひとつ大きな進展があった。プロ野球ではじめて日本ハムファイターズの主力バッテリーが名護市営球場でキャンプを行ったのである。いまでは日本と韓国のプロ野球、Jリーグやバスケットボールなどをはじめとするさまざまなスポーツ分野で大会やキャンプ、研修が行われ、スポーツツーリズムは沖縄観光の柱のひとつになりつつある。

また、同年には南西航空(現JTA)が石垣線にジェット機を就航させ、全日空は羽田 − 沖縄線にスーパージャンボ機を投入してドル箱路線の充実を図った。定三は「沖縄観光の将来は足の確保、つまり航空路線で決まる」と、路線や運賃についてはつねに先頭に立って要請を行っていた。

また、客引きや押し売りへの苦情が少なくなかったことから、全国に先駆けて同じ昭和五十四(一九七九)年に沖縄県観光振興条例が制定(昭和五十五年に施行)された。この条例には不当な客引き行為、不当な案内の禁止、不当な金品の授受の禁止、迷惑行為の禁止に加えて修景美化区域の指定、集落景観保存区域の指定などが盛り込まれ、全国の観光振興条例の先駆となった。

海洋博後の反動とその後の復活の過程では、こうしてその後の成長への基盤となる戦略と体制が徐々に整っていったことがわかる。観光客数が昭和五十四(一九七九)年には百八十万人と過去最高にのぼった背景には、これだけの地道な積み重ねがあった。「海洋博」という一時のイベントに頼らずに、同等以上の観光客を引きつける力

札幌にて行われた親善交歓会にて記念品を贈呈する宮里定三氏

を沖縄は手にしつつあった。ようやく、沖縄観光は危機を脱して、新たなステージに立ったわけだが、そのときに定三はこう警鐘を鳴らしている。

観光振興は大いに結構だが、本土資本では地元に金が落ちるはずはない。また地元のホテル旅館がアニマル精神の彼らに踏みつぶされるのは目に見えている。やりたい放題にさせていたら、沖縄の観光は逆戻りだ。薩摩侵略と同様、再び沖縄経済が搾取される時代になりかねないのだ。

だが、企業エゴで通せんぼするわけにはいかない。法的に規制することも困難である。そこで私たち沖縄県旅館環境衛生同業組合、つまり沖縄中のホテル旅館業者が、宿泊施設の適正規模を設定して無制限進出をチェックして欲しい、と県に訴え続けている。もう二度と海洋博時の二の舞いは、踏みたくないのだ。

沖縄の観光振興は、ぜひ地元の手でやるべきである。あわてることはない。子や孫の代までかかってもいいではないか。地元の経済を潤す観光振興を、県もわれわれも推し進めていかねばならないと思う。

(『私の戦後史・第五集』から)

昭和54(1979)年2月8日付、琉球新報社提供

こう定三が書いたのは昭和五十六(一九八一)年のことだった。このあと、沖縄観光はさらに伸び、変貌していく。

四、理想のリゾートへの道

昭和五十六(一九八一)年の川治プリンスホテル(栃木県)、翌年のホテルニュージャパン(東京都)と多数の死者を出す火事が連続し、旅館ホテルの防火安全対策が厳しくなった。いわゆる適マーク対応問題である。全国の

ホテル旅館が防災設備の審査を受けて適マークを交付されなければ、顧客の信用を失うばかりか、旅行社指定からも外れることになる。沖縄県ももちろん例外ではなかったが、適マーク交付基準に適合するような防災設備にかかわる資金のやりくりが問題となった。多くは防災資金の融資を受けるなどして適マークの交付を受けたが一部はやむを得ず廃業に至ったところもあった。日本交通公社をはじめ、各旅行社でも協定旅館には適マーク交付を原則としたが、未交付でも時間的な猶予を見るなどして柔軟に対応した。定三は自身も東京のホテルで火事に遭遇した経験があり、安全に関して手抜きをしてはいけない、と真剣に取り組んだ。

昭和五十五～五十八(一九八〇～一九八三)年にかけて、沖縄への観光客は年間二百万人を目前にしながら足踏みがつづいていた。昭和五十六(一九八一)年の百九十三万人をピークにして、その後は二年つづけて微減した。

背景には第二次オイルショックによる不況と航空運賃高騰(昭和五十四～五十五[一九七九～一九八〇]年)の影響、さらに国鉄の値上げを契機に新幹線から飛行機に客が流れるのを防ぐ施策として空港着陸料が大幅に引き上げられたことが大きかった。また、その後のプラザ合意(昭和六十[一九八五]年のG5における協調してドル安を図る合意。実質的には円高誘導となり、バブル景気の一因となった)に始まる円高の進行で、海外旅行との競合が激化したことも沖縄には不利だった。

そうしたなかで、毎年百八十万人以上の観光客数を維持しつづけたことは、むしろよく健闘したというべきだろう。そして昭和五十九(一九八四)年に待望の二百万人を突破した。

昭和五十五(一九八〇)年以降、沖縄観光をリードしたのはリゾートホテルだった。その先駆けはなんといってもホテルムーンビーチである。このプロジェクトを牽引した國場幸一郎は、海外出張のたびに世界のビーチリゾートを回っては参考にしたという。地元資本である國場組によって沖縄海洋博が開かれた昭和五十(一九七五)年に開業したこのホテルは、三日月形の美しいプライベートビーチを抱え、客室から水着のままでビーチに出られるリゾートホテルの典型であり、その後は立地する恩納村を中心とした西海岸にはリゾートホテルが続々と建つことになる。

ホテルムーンビーチの名が全国に知れ渡ることになったのは、山口百恵と三浦友和が主演した当時の人気ドラマ『赤い衝撃』にロケーションの舞台を提供したことがきっかけだった。ホテルをベースに、沖縄各地で撮影された映像が伝えた沖縄の美しい海と本格的なリゾートのインパクトは大きかった。この放送を契機にハネムーン客が続々と訪れるようになり、沖縄のリゾート観光に注目が集まった。沖縄が新婚ブームに湧いた時代には旅行業者の間で「ムーンビーチの一室はダイヤモンド一個に等しい」とまで言われるほどの人気を誇った。沖縄にリゾート文化を持ち込んだ開拓者として、ホテルムーンビーチの果たした役割は重要であった。

つづいて昭和五十八(一九八三)年に全日空ホテルズ系列の万座ビーチホテルがやはり恩納村にオープンする。この時期には若い女性を中心に沖縄が人気の観光地になっており、その巧みな宣伝もあって万座ビーチホテルは一種のステイタスシンボルと化して、大変な人気を博した。映画『メインテーマ』(薬師丸ひろ子主演)の舞台となったことも人気に拍車をかけた。

本格的なリゾートブームの到来である。この両ホテルをはじめとして、昭和六十二～六十三(一九八七～一九八八)年にはサンマリーナホテル、かりゆしビーチリゾート、残波岬ロイヤルホテル、ラマダルネッサンスリゾートオキナワ(現・ルネッサンスリゾートオキナワ)、と大型ホテルが次々とオープンしていった。

ロマンティックな夕日、美しいビーチ、最高のサービスを楽しむ、ゆったりした旅のかたちは、大型バスに乗って観光地を回る団体旅行とは違ったタイプの旅が求められている時代がやってきたことを示していた。また、万座ビーチホテルの成功と沖縄全体における観光業の盛況で、本土資本の開発に対する反感は薄らぐ結果となった。

付言すれば、離島はむしろ本来のリゾート地としての適地という見方もできる。はいむるぶし(小浜島、昭和五十四年開業)や久米島イーフビーチホテル(昭和五十二年開業)をはじめとして、本島西海岸にとどまらず、リゾート滞在型の旅は沖縄旅行の大きな潮流となって現在に至っている。

五、沖縄観光の体制変革

沖縄コンベンションセンターは昭和六十二(一九八七)年に展示棟と会議棟、平成二(一九九〇)年には劇場棟が完成した。国際会議や展示会をはじめ、コンサートやイベント、スポーツなどに活用されている。こうした

1980年代、沖縄観光をリードしたのは恩納村にあるホテルムーンビーチ

リゾートホテルが建ち並ぶ沖縄本島西海岸地域

イベントやスポーツに活用される沖縄コンベンションセンター

大型施設の充実もまた観光産業の基盤のひとつである。

また、運営主体として財団法人沖縄コンベンションセンターが昭和六十一(一九八六)年に設立された。ホール建設に先立ってコンベンション誘致のためのコンベンションビューローの必要性が提言されたこともあって、県観光文化局、沖縄コンベンションセンター、県観光連盟の三者が検討を開始し、昭和六十二(一九八七)年にはオキナワコンベンションビューローが設立され、会長には瀬長浩沖縄銀行代表取締役会長が就任し、副会長には宮里定三も名を連ねた。

その後の観光関連各団体の統合について、ここでまとめておく。

沖縄県観光開発公社(昭和四十七[一九七二]年設立)は昭和四十八(一九七三)年に海洋博に向けてつくられた沖縄県リゾート開発公社、並びにアクアポリス管理財団と機能統合して昭和五十四(一九七九)年にその機能を引き継ぐ。平成六(一九九四)年にはこの財団法人沖縄県観光開発公社と社団法人沖縄県観光連盟が統合して財団法人沖縄ビジターズビューローが発足する。ハード面を整備する観光開発公社とソフト面を担当する観光連盟は、車の両輪ともいえる活動を行ってきたが、復帰後はそれぞれの業務に重複があり、統合を図ったほうがよいということになり、定三も観光沖縄を牽引する組織がより力を発揮するために統合を進めた。その後、定三は新組織である沖縄ビジターズビューローの顧問に就任し、沖縄観光業界のご意見番、水戸黄門のような立場から観光について助言する役割を担う。

平成八(一九九六)年にこの財団法人沖縄ビジターズビューローと財団法人沖縄コンベンションセンター、任意団体オキナワコンベンションビューローの三団体が統合して、財団法人沖縄観光コンベンションビューロー(OCVB)がスタートする。この際にも定三は顧問に就いて、一生現役であった。

OCVBは沖縄県への観光客とコンベンションの誘致を目的としており、関係各団体を統合することで、観光の専門家集団として総合的に沖縄県の観光行政を補完することが期待されている。

財団法人沖縄観光コンベンションビューロー創立祝賀会にて

オキナワコンベンションビューロー創立5周年記念式典にて、表彰される宮里定三氏

六、さまざまなイベント展開

観光施策としてのイベント展開や大型施設のオープンも相次いだ。主なものをまとめてみた。

沖縄花のカーニバル(昭和五十九[一九八四]年)
宮古島トライアスロン開始(昭和六十[一九八五]年)
熱帯ドリームセンター開園(昭和六十二[一九八六]年)
海邦国体(昭和六十二[一九八七]年)
海のカーニバル(昭和六十二[一九八七]年)
サントピア沖縄(昭和六十三[一九八八]年)

宮古島トライアスロンは、島民の熱い応援と島ぐるみのサポート、感動的なゴールで有名になったが、歴史は意外に新しい。成功の鍵は島民への徹底した説明と数千人にのぼるボランティアの活用、さらにNHKのテレビ取材のタイミングのよさだった。最後の完走者のゴールとそれにつづいて地元の人たちが走る姿が全国に中継されて、大きな感動を巻き起こした。

修学旅行の誘致はオフシーズン対策としても有力で重要な課題だったが、当初は鉄道利用の修学旅行がほとんどで、航空機利用がメインの沖縄にとっては大きな壁となっていた。このため、沖縄県から国に修学旅行での航空機利用を可能にするよう要請し、昭和六十三(一九八八)年に文部省(当時)が修学旅行での航空機利用は各学校などの自主判断としてから、沖縄への修学旅行が伸び始めた。平成二(一九九〇)年の五〇三校、八五、二九三名から、平成十一(一九九九)年には一、三七三校、二六三、八四三名へと、校数で約二倍、人数で三倍と大幅に増えたが、平成十三(二〇〇一)年の9・11テロで大打撃を受けた。この件については次章で詳しく触れる。

沖縄県での修学旅行では定番の平和や海などの自然をテーマにした学習に加え、環境や歴史、文化にわたって幅広い学習テーマが取り上げられている。最近では伊江島を先駆事例とする民泊利用が高評価を得ており、地域の活性化効果もあって注目されており、他市町村にも波及している。また、エデュケーショナルツーリズム事業として海外の学校との交流、県内学校の意識の活性化も課題となっている。

熱帯・亜熱帯のめずらしい花や果実が楽しめる熱帯ドリームセンター

美しい花々で観光客をもてなす沖縄花のカーニバル

七、一九九〇年代の躍進の背景

平成二(一九九〇)年に沖縄県への入域観光客数は二百九十五万人をこえ、前年の二百六十七万人から大幅に増加した(二十三・四%増)。ひとつには日本が謳歌していたバブル経済の影響と思われる。

もう一つの理由にはトロピカルリゾート構想と第三次沖縄振興開発計画を挙げなければならないだろう。昭和六十二(一九八七)年のリゾート法公布をうけ、沖縄トロピカルリゾート構想は平成三(一九九一)年に三十一番目の認定を受けた。この構想では十か所の重点整備地区を指定し、それぞれの特性に応じてリゾート形態(定住型、スポーツ型、レジャー施設型、ヘルスケア型、自然体験型など)やパーク・イメージ(マリーナ、マリンビーチ、リサーチ、ヘルスケア、サンクチュアリーなど)を設定して整備の方向性を定めている。

第三次沖縄振興開発計画では、たとえば名護市許田から石川市までだった沖縄自動車道が那覇市まで延長された。レンタカー事業者数は平成八(一九九六)年頃から増加傾向にあり、観光客の主要な移動手段になりつつあった。バブル経済の崩壊、円高の進行による海外旅行の増加にもかかわらず、沖縄観光は順調に伸びて平成三(一九九一)年には観光客数は三百万人を突破した。

バブル経済崩壊によるリゾート開発の中止が相次ぐなかで、沖縄県ではラグナガーデンホテル、ホテル日航アリビラ、ロワジールホテル、リザンシーパークホテル谷茶ベイなど、続々と大型ホテルがオープンした。

この時期の主なイベントを挙げてみよう。第一回世界ウチナーンチュ大会(平成二[一九九〇]年)は、海外移民の仕事からはじめた宮里定三にとっては待ち望んでいた大会でもあった。世界中に移民し、県人会をつくり、沖縄の誇りを持って生活している沖縄出身者が一同に会する大会の入場者数は予想をこえる四十二万人に達し、いまも継続して開催されている。

首里城正殿復元完成(平成四[一九九二]年)や、NHK大河ドラマ『琉球の風』放映(平成五[一九九三]年)では日本中からの注目が沖縄に集まった。

この頃、恩納村に琉球村が開業。沖縄の伝統家屋を移築し、工芸や文化を体験できる参加型の施設として、観光客はもちろん、地元の人たちにも親しまれている。

平成九(一九九七)年に那覇空港の着陸料と航行援助施設利用料が六分の一に、航空機燃料税が二分の一に軽減される措置が取られたこともあり、沖縄路線の運賃引き下げや新規路線就航により、やや伸び率が鈍化していた観光客数の飛躍的増加につながった。

平成十(一九九八)年、ついに沖縄を訪れた観光客は四百万人を突破した。三十年前、ハワイで観光客数を尋ねられて口ごもった定三は、どんな思いでこの数字を見つめただろうか。今なら胸をはって堂々と言える。いや、伸び率ならハワイをはるかに凌駕している。復帰前の期待と不安、海洋博直後の苦しい時期、なかなか観光客数が伸びなかったころ――。自らのたどってきた道を振り返って、万感の思いに浸ったに違いない。

平成十二(一九九九)年はまさに沖縄の年だった。

春の選抜高校野球で沖縄尚学高校が悲願の沖縄県勢として初の全国優勝を果たし、守礼門をデザインに採用した二千円札が発案され、翌年のサミット開催地が沖縄県に決定した。サミットの沖縄開催に奔走した定三らの苦労が報われた。また、安室奈美恵、SPEEDら沖縄アクターズスクール出身のアーティストをはじめとした沖縄出身のタレントの大活躍も印象深い。この年の観光客は四百五十五万人をこえて大幅増となった。

しかし、定三がつねづね語っていた通りのことが平成十三(二〇〇一)年に起こる。いわゆる「9・11ショック」である。「観光というのは水物である。今年観光客が多かったからといって、来年も増えるという保証はどこにもない」。

成功に慢心することなく、つねに最高のサービスを提供しつづけること。それこそ、定三がめざしていたことだった。

八、宮里定三が遺したもの

平成十二(一九九九)年に、沖縄職業能力開発大学校・沖縄ポリテクカレッジに「ホテルビジネス科」が新設された。この前年には、ホテルビジネス科新設を機に、沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合が宮里定三の肝いりで「沖縄県ホテル

工芸や演舞体験を通し、琉球の文化や伝統を伝える観光テーマパーク琉球村

各国の民族衣装に身を包んだ世界のウチナーンチュたちによる凱旋パレードの様子

旅館人材育成基金(略称ミヤザト基金)」が創設され、同科の学生を対象に無利子で奨学金を貸与するシステムが設定された。かねて旅館ホテル業界の人材育成に熱心だった定三は真っ先に寄付し、さらに「宮里定三の名前を残すべきだ」という観光関係者の願いで県内の銀行やホテルをはじめとする企業・団体からの寄付で原資二千万円が集まった。

このホテルビジネス科が開講するわずか一か月前に、宮里定三は亡くなった。沖縄県観光連盟の会長を十期二十年、沖縄県ホテル旅館業界の代表者として四十年余にわたって沖縄観光の舵を取ってきた。最後までサミットの誘致とかりゆしウェアの普及に取り組んできただけに、平成十二(二〇〇〇)年のサミットと、各国首脳がかりゆしウェアに身を包んで談笑する姿を見られなかったのは、実に残念というほかはない。しかし、ミヤザト基金を活用して育った若い人材が、きっとその夢を受け継いでいくことだろう。

逝去の二か月前に沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合に預けられた遺稿には、沖縄観光に生涯を捧げた感慨が綴られている。幼年期を過ごした羽地村(現名護市)に真喜屋ダムの建設工事がすすんでいた折りでもあり、そこで川エビを獲り、鮎を眺めた思い出を語りながら、その自然景観が失われる寂しさを綴っている。

また、別の文章では海洋博後遺症から立ち直る経緯に触れている。

ここで立ち止まっては沖縄観光が自滅する恐れもあると意を新たに観光業界が結束し、行政と一丸となって誘客キャンペーン隊を組織して、沖縄観光の魅力を全国的にPR作戦を繰り返し継続した。

その甲斐あって逐次入域客は飛躍し続けて今や年間四〇〇万人に達している。

(『沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合　30年のあゆみ』より)

沖縄観光の発展はまさに宮里定三とともにあった。その強力なリーダーシップがあったからこそ、海洋博直後の苦境はもとより、沖縄観光が何度か遭遇した危機を乗りこえることができたのである。

宮里定三氏が死去

ホテル業界発展に貢献

平成11(1999)年3月4日付、沖縄タイムス社提供

第六章　沖縄ツーリズムの新時代

沖縄観光がここまで躍進してきた理由には、観光関係者の宣伝や集客の努力はもちろんのこと、海洋博を契機にしたインフラの整備、航空会社・旅行会社のキャンペーンによる認知度アップ(とくにビーチリゾートとして)、宿泊施設など受け入れ体制の整備(量および質において)などが挙げられるだろう。

加えて、平成に入るころから沖縄への旅行タイプの変容が見られるようになってきた。宿泊施設では、恩納村を中心にビーチリゾートおよび久米島、八重山、宮古島などのリゾート大型ホテルと、宿泊特化型のホテル・民宿・ドミトリーなどとの多様化あるいは二極分化が起こってきた。航空運賃の自由化および近年のLCC(＊注1)の台頭は沖縄にとって追い風となっている。昭和五十八(一九八三)年にはわずか二割であったリピーターは、平成九(一九九七)年には半数をこえ、最近の調査(平成二十六[二〇一四]年)ではついに八割に達して逆転している。

団体旅行から個人旅行へ、見るだけでなく参加型・体験型へ、既成の観光ポイントでは飽きたらず、沖縄の生活文化・ライフスタイルへの強い関心――こうした流れは今後もつづくだろう。

さらにエデュケーショナルツーリズム(修学旅行などの学校間交流)、スポーツツーリズム(プロ野球キャンプや各種大会)、リゾートウェディング、医療ツーリズム、沖縄サミットを契機にしたMICE(＊注2)適地としての期待に加え、最近の大きなトピックは、アジア圏を中心とする外国人観光客の増大であろう。外国航空路線の充実、クルーズ船寄港への対応はもとより、「対応」の段階ではなくプロモーションによって外国人観光客の増加を図り、受け入れ体制を充実すべき段階にきている。

この章では、二〇〇〇年サミット以降の沖縄観光を概観し、今後の展望を見通してみたい。

＊注1
Low Cost Carrier[ローコストキャリア]の略で、効率化により低価格の航空輸送サービスを提供する格安航空会社のこと。

＊注2
Meeting[会議・研修]、Incentive[招待旅行]、Conferenceまたは Convention[国際会議・大会]、Exhibition[展示会]の四つの頭文字をとりビジネス関連で多人数のイベントを観光・ビジネスの視点から着目した用語。

一、サミット成功と世界遺産登録

平成十二(二〇〇〇)年は、サミットの警備強化のために四月~八月の観光客数は前年実績を下回ったが、その後に回復して前年からほぼ横ばいの観光客数であった。この年、特記すべきことは、十二月に首里城をはじめとする史跡が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録されたことだ。

九州・沖縄サミットは国際的な知名度向上につながり、また実務に携わったスタッフにとっては国際的マナーや外交儀礼の経験を積む場となった。外国人観光客への対応、受け入れ体制にも万全を期し、MICE適地をアピールした効果も大きかった。県産品の販路拡大にとっても泡盛、塩、かりゆしウェア、健康食品などが大きくクローズアップされた。

沖縄を訪れた世界中の記者にも沖縄は強い印象を与えた。ただし、そのなかには「米軍基地」と「リゾート」という相反するイメージに注目するものもあった。観光は平和であってこそ楽しめる。そのことを、翌年に沖縄は思い知らされることになる。

二、9・11ショック

平成十三(二〇〇一)年はNHK連続ドラマ「ちゅらさん」の人気もあって、九月までの観光客数は過去最高ペースで推移していた。そこに、九月十一日、アメリカで同時多発テロ事件が起こった。当初はこの事件が沖縄の観光産業に大きな影響をもたらすとは想像ができず、初期対応は鈍かった。その後、修学旅行を中心に大量のキャンセルが発生し、最終的にはキャンセルは計二、三三〇件、二四九、六六二人にのぼった。この県発表の数字は修学旅行と一般団体旅行を合わせたもので、個人旅行客は含まれていない。一方、この年にオープンしたユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)や東京ディズニーシーは好調に推移した。修学旅行や観光旅行は米軍基地のある沖縄を嫌い、テーマパークに流れた。

首里城と同じく世界遺産に登録された今帰仁城跡は、美しい曲線の郭が印象的

平成12(2000)年12月、世界遺産に登録された首里城跡

キャンセルの電話はつづき、沖縄観光は風評被害の怖さを身をもって知ることになった。文部科学省が各都道府県教育委員会にあてた文書で、海外旅行への注意を喚起したのも一因となった。東京都、神奈川県、新潟県の三教育委員会は沖縄県を特定して各高校に「米軍基地には近寄らないように。行程の工夫を」などとした文書を送付した。父母から「絶対安全か」と詰め寄られた学校側の立場は弱かった。さらに噂は広がり、過剰反応もあらわれた。マスコミが報じる米軍基地のものものしい警備の映像や、沖縄への自衛隊派遣といったニュースも沖縄への不安をかきたてた。過剰なマスコミ報道による「沖縄は危険」という思い込みや、学校関係者や父兄の不安はなかなか解消されなかった。現実の沖縄はいつもと同じように安全なのに、観光客は来てくれない。まさに「風評被害」というほかなかった。

海洋博ショックと同様、まず苦境に陥ったのはホテル旅館だった。十月八日にアメリカがアフガニスタンを報復爆撃すると、キャンセル数はさらに跳ね上がった。客足は前年比で二~三割減まで落ち込んだ。そしてキャンセルの影響は、さまざまなところであらわれた。まず、電力使用料が減った。青果市場では果物や野菜が売れなくなった。ホテル関係にとどまらず、居酒屋、コンビニ、観光バス、弁当など需要冷え込みの影響は深刻だった。このことは、観光業のすそ野の広がりを如実にあらわしていた。観光業界は別の世界ではない、自分の生活に直結しているということを、観光業とは直接の関わりがなかった県民も肌で感じたことで、沖縄における観光への認識は一変した。

沖縄振興開発金融公庫の緊急特別貸付制度でひと息つけたとしても、今後の見通しはつかない。ホテルはコスト削減、リストラに向かい、旅行社は安売り競争で消耗した。恩納村のように観光業が財政の柱になっているような市町村では、致命的な打撃になりかねなかった。風評被害の対策として、国は沖縄担当、国土交通、文部科学の三大臣の連名で都道府県知事に対して沖縄への修学旅行について「特段の配慮を期待する」とした文書を配布し、「だいじょうぶさぁ~沖縄」の予算として四億五千万円、さらに沖縄に何度も航空会社や旅行社のトップらを呼んで支援を約束させた。

各ホテルは、ターゲットを地元に切り替えた。沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合では、宿泊割引券を発行して、県民にホテル利用を呼びかけて「一人一泊県民運動」を展開。ホテル利用割引券を支援のために買い取る企業も多く、年末年始には地元客がホテルに数多くみられた。沖縄タイムス社のアンケートによれば雇用調整は観光関連企業で四

割にのぼり、自主退職を含む解雇や自宅待機、労働時間短縮などコスト削減に苦しむようすが浮かび上がる。

沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合が「この危機は基地が集中する沖縄への不安から生じた」と基地被害を訴えて国の「災害補償」を求めたが県は「難しい」と首を夕テにふらない。「風評被害ではない。基地被害だ」の声は根強い。

三、回復へ

海洋博後の不況につぐ危機に際して、沖縄県と観光業界は官民一体となってふたたび大規模な観光キャンペーンを展開した。本土にキャラバン隊を派遣し、国から四億、県から三億と七億円を確保して「だいじょうぶさぁ～沖縄」キャンペーンを女優の平良とみをキャラクターに起用して新聞テレビに宣伝するイメージ戦略をとる一方、「沖縄ではいつもと同じように暮らしています」と風評を打ち消した。

県外自治体からの応援ツアーも相次いだ。福島、静岡からは知事が先頭に立って来県した。リピーター客の協力もあった。風評被害がほとんどなかったダイビング客などのリピーター層への情報発信、口コミ効果は今後重要になるだろう。何度も沖縄を訪れているリピーターからは、「何かお手伝いできることはありませんか?」という申し出まであったという。

東京都立武蔵村山高校は「がんばろう!沖縄　私達も〝基地の街〟から来ました」の横断幕とともに沖縄を訪れた。父兄へのアンケートでは八割が反対したにもかかわらず、生徒たち自身が「基地があるから不安」という声に「基地は東京にもある」という意見を出し合うなど、話し合うことで不安を解消していき、すでに沖縄への修学旅行を実施した近隣の高校からの「素晴らしい思い出をつくることができ、本当に沖縄に行って良かった」という手紙のあと押しもあって、沖縄行きを決めた。こうした事例は綿密な事前学習と地元の協力があったからこそで、旅行社まかせにせず、直接地元の交流チャネルが存在する強い結びつきの成果ともいえるだろう。

観光業界をあげての取り組みや国や県の施策、イベントの成果もあって翌平成十四(二〇〇二)年一月以降は国内観光客が前年並に戻り、三月には回復基調となった。半年後には回復ペースになったわけで、修学旅行は平成十七(二〇〇五)年には四十万人をこえた。

沖縄観光の歴史では、危機に際して団結し、危機前よりもより成長するパターンが何回か繰り返されている。危機をバネとした努力の成果であると同時に、「のどもと過ぎたらあつさ忘れる」のような健忘症であってはならないであろう。観光のもろさを再認識して、より逆風に強い体質に再生しなければならない。たとえばツアーは価格でなく、内容で勝負する。観光客の数ばかりでなく、「もう一泊、もう一万円」と指標を変えて考え、旅行の内容をもっと高める工夫をする。まだまだやらなければならないことは多い。

この「9・11ショック」の経験から、「沖縄観光危機管理マニュアル」が策定された。観光行政においては初めての危機管理対策のマニュアルであり、その後のSARS(重症急性呼吸器症候群)の感染拡大や新型インフルエンザの流行の際に活用された。今後も危機管理体制の充実が望まれる。

四、かりゆしウェアが普及するまで

暑く湿度の高い沖縄の気候に適した衣服としては、芭蕉布や紅型に彩られた王朝時代の礼服などがある。戦後日本にはホンコンシャツのようなものもあったが、安物イメージがつきまとっていた。

かりゆしウェアの発祥は、昭和四十三(一九六八)年のハワイ視察で宮里定三が「アロハシャツのように沖縄らしいデザインで沖縄の気候にあったものを」と発案したものにさかのぼる。県民にデザインを公募し、昭和四十五(一九七〇)年に「おきなわシャツ」として赤いハイビスカス柄などが五ドルで売り出された。当時二ドルでシャツが買えた時代であり、赤い派手な柄もあいまって一万着作ったうちの三千着しか売れなかったという。その売れ残ったおきなわシャツをホテルの従業員のユニフォームにしたところ、観光客のなかからほしいという声が出てきた。その声にこたえてホテルの売店などで売り出したが、ちょうど海洋博の年にあたり、海外からの粗悪品が型くずれや色落ちで評判が悪く、県民からも不評であった。その後の第二次オイルショックのときに省エネ指導の一環でスーツではなくおきなわウェアを、と発売したが、やはり普及することはなかった。

しかし、定三らは諦めずに粘り強く普及の努力を継続した。平成元(一九八九)年に普及運動が決定し、翌年には混乱しかけていた名称(トロピカルウエア、かりゆしシャツ等々)を公募で決まった「かりゆしウェア」に統一した。さらに、沖縄の伝統工芸柄に限定したデザインを「沖縄の観光をアピールするものであること」に変えた。この変更でどうしても地味な色や模様が多かった伝統柄に加えて自由な発想のデザインが加わり、高価格になりがちだった絣やミンサー、紅型に限定しないことで価格も手の届きやすいものとなった。また、開襟シャツという制約も外し、もう二つの条件は「沖縄で縫製されたもの」とした。こうしてかりゆしウェア普及の道すじは整った。

沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合は平成元(一九八九)年以来、かりゆしウェアの普及のために仕入れ販売を行ってきた。ブレイクしたのは沖縄サミットで、各国首脳が着用して談笑する様子が報じられてから徐々に官公庁でも着用が増えていった。この年には「ハイサイ!かりゆしウェア愛好会」が結成され、湖城英知海邦銀行頭取が会長に選任されて積極的に普及を図った。

関係者の努力が実って平成十六(二〇〇四)年には三十万着を突破、観光業者や行政関係者だけでなく、県議会をはじめ、官公庁や銀行などの企業でもかりゆしウェアが採用されている。現在では多様なデザインに加え、女性用、喪服用、長袖なども発売され、一般に広く普及している。

五、航空運賃自由化をはじめとする環境の変化

平成十二(二〇〇〇)年、航空運賃は認可制から届出制になり、自由化時代に突入した。いまのところ、沖縄は運賃が低価格になり、恩恵をこうむっているが、油断は禁物である。魅力的な観光地でなくなり、需要が減った途端に運賃が上昇する可能性があるからだ。

平成十五(二〇〇三)年にはSARS(重症急性呼吸器症候群)やイラク戦争の影響があり、台湾からのクルーズ船に寄港自粛要請をするなど台湾からの観光客が減少し、また台湾の旅行社から沖縄への不信感が増大する事態になった。こうした場合の信頼回復への施策は重要である。観光危機戦略を日常的に準備するとともに需要の創出、誘客キャンペーンが大事である。幸い、SARSはまもなくおさまり、台湾からの観光客も回復している。

平成二十(二〇〇八)年、リーマンショックによる世界的な景気低迷、新型インフルエンザにもかかわらず過去最高の六百万人をこす観光客を迎え入れたが、翌年には前年割れをおこして五百六十五万人にとどまった。

おきなわシャツと呼ばれていた頃のデザイン。写真提供:大城吉永氏

かりゆしウェアを寄贈する宮里定三氏

県外でのイベント時には必ずかりゆしウェアを着用

現在では色とりどりのデザインがあるかりゆしウェア

六、関心の多様化

現在の沖縄にとって、なくてはならない施設がこの時期にできている。平成十三(二〇〇一)年には沖縄美ら海水族館がオープン、その翌年には沖縄都市モノレールゆいレールが開業した。ショッピングでは平成十四(二〇〇二)年に豊見城市に沖縄アウトレットモールあしびなーが、平成十七(二〇〇五)年に那覇市に免税店DFSギャラリア(現・Tギャラリア)がオープンした。

現在の沖縄観光ではますます多様化が加速している。

沖縄リゾートウェディングは平成十四(二〇〇二)年に県が専門家のアドバイスを得て誘致に取り組み、チャペルは三か所から六か所に増えている。リゾートウェディングは新規の客層にアピールし、他産業への波及効果(美容、生花、衣装など)もあり、外国人観光客にも訴求できるため、今後有望視されている。平成二十三(二〇一一)年には沖縄リゾートウェディング協会が発足した。

平成二十一(二〇〇九)年からは沖縄国際映画祭がはじまり、三~四月の集客に一役買っている。四月には琉球海炎祭(平成十六[二〇〇四]年に第一回を開催)が日本一早い花火大会として人気を得つつあり、NAHAマラソンはもはや十二月の風物詩として定着した感がある。

いままさに沖縄観光は大人気であるが、だからこそ宮里定三の警鐘に耳を傾けるべきではないだろうか。今がどんなに好調であろうと、明日を保証するものは何もない。やるべきことは、誠実に最高のサービスを提供しつづけることである。

県外から多くの観光客が訪れる沖縄国際映画祭

美しいロケーションを利用したリゾートウエディング

県民だけでなく観光客も大いに利用するゆいレール

温暖な気候を利用し、12月に開催されるNAHAマラソン

アジアからの観光客にも人気が高い沖縄アウトレットモールあしびなー

第七章　これからの沖縄観光に向けて

一、東日本大震災以来の状況

平成二十三(二〇二一)年の東日本大震災で日本は大きな被害をこうむり、沖縄県も被災者の受け入れ、支援などの対策をとった。訪日外国人観光客が激減するなか、沖縄では手控えから国内観光客数は減少したが、外国人観光客は大きな影響を受けず、過去最高の二十八万人にのぼった。全体では五百四十二万人と前年並を維持した。海外からの観光客への対応では、平成二十三(二〇二一)年からは中国人観光客向けの数次ビザ発給で、沖縄への観光客数は大幅に増加した。日本への旅行で、沖縄に最低一泊すればその後三年間はビザが不要になる制度の恩恵ともいえる。同年に北京―那覇航路が開設したことも好影響をもたらした。

プロ野球のキャンプでは同じく平成二十三(二〇二一)年から読売ジャイアンツが沖縄でのキャンプを開始し、日本のプロ野球十二球団中十球団が、韓国からは九球団中五球団、さらに台湾からもプロ野球チームが沖縄でキャンプを実施するという圧倒的な実績に結実した。野球以外でもゴルフ、サッカー、バスケットボール、ビーチサッカー、自転車などの競技でスポーツツーリズムは芽生えている。

アジアのクルーズ船市場の動向でも、若狭バースの受け入れ設備の整備が望まれる。尖閣問題の影響はまだ予断を許さないが、当面は影響がおさまっているようである。ＬＣＣはひきつづき沖縄への足として大きな役割を果たすに違いなく、既存エアラインとの共存が図られることがもっとも望ましい。

二、これからの沖縄観光

今後の課題を列挙してみよう。

那覇空港新国際線ターミナルは始動したばかりだが、将来の第二滑走路供用、外国人観光客の増加傾向を考えると再考の必要があるだろう。クルーズ船が立ち寄る若狭バースの早急な整備、通訳ガイドの養成(とくに中国語、韓国語、スペイン語)も急務である。Ｗｉｆｉ環境も不十分なままだ。海外からの観光客については、すでに対応から誘致へと舵はきられているが、今後の課題は受け入れ体制の充実、たとえば観光バスの手配などにおける協調や道路景観の向上などが挙げられる。いまや、世界で沖縄が存在感を魅せつけるようなステージを目指す時期にきている。

交通機関ではＬＣＣを活用したプランや、渋滞解消のための施策を望みたい。レンタカー以外の交通手段も要望が多い。雨天時や夜間に楽しめるプログラムにも、もっと幅がほしい。今後はＳＮＳ(＊注1)を活用した交流イベントも増えるという予想のもと、取り込む工夫を考えておかねばならない。

一人あたりの県内旅行消費額を高めることも重要だ。観光客数だけをとれば沖縄はハワイと肩を並べたといえるかもしれないが、平均滞在日数や一人当たりの消費額では、いまだに二～三倍の差がある。これからは沖縄における旅行の「質」を高める努力が求められている。

さらにエコツーリズム、ＭＩＣＥ(大型会議など)誘致、医療ツーリズム、スポーツツーリズム、文化観光(空手や舞踊など)、エステやスパ、アンチエイジングなどキーワードには事欠かない。長期滞在型も増えるであろうし、たとえば地域支援としてサンゴ植え付けやマングローブ植林をするようなツアーも考えられる。

新鉄道構想のような巨額の資金が必要なプランも検討すべきだが、少資金でも地域が主体になった観光、たとえば那覇市の「まちまーい」のような成功事例がある。知恵をもっと出し、勇気をもって実現していくことが必要ではないだろうか。沖縄よりも面積の小さい香港、シンガポールがすでに年間の国際観光客

＊注1
Social Network Service[ソーシャル・ネットワーク・サービス]、mixi、facebook、LINEなどのインターネットによるコミュニティ型の交流サービスのこと。

到着数でそれぞれ二千五百万人、一千万人をすでに達成していることを考えれば、沖縄の治安と安心など独自価値をアピールしていき、ブランドを構築することで、沖縄観光はもっと発展する素地をもっている。

エピローグ

沖縄観光の今後にどんな危機が訪れても、あの海洋博ショックや9・11テロという危機を乗り越えてきた経験が、修羅場をくぐり抜け復活する知恵と力をもたらすはずである。そう思わせるものが、沖縄観光の歴史には宿っている。そして、そこには沖縄観光に生涯を捧げ、つねにリードしてきた宮里定三の魂（マブイ）もまた込められている。

あの悲惨な沖縄戦から復活したからこそ、沖縄は決して屈することなく発展し続けるに違いない。宮里定三のまなざしは、どこまでも遠くを見据えている。

スペシャルインタビュー

[スペシャルインタビュー]

宮里会長の識見と手腕が沖縄観光を盛り上げた要因

株式会社南都　代表取締役会長 **大城 宗憲 氏**

Profile

1936（昭和11）年、那覇市出身。1971（昭和46）年、創業。1972（昭和47）年に観光鍾乳洞「玉泉洞」を開業。開園当初から人気を集め、沖縄を代表する観光施設に成長した。1996（平成8）年に「玉泉洞王国村」として本格的テーマパークをスタート。2002（平成14）年には名称を「おきなわワールド」に変更し、現在に至る。

重みのある言葉

宮里定三氏との思い出で、もっとも記憶に残っていることは？

いちばん印象的な例をお話しましょう。首里城跡にまだ琉球大学工学部があったころ、テレビ塔の建設問題で西銘順治知事（当時）と会食した際のことです。沖縄観光連盟として、宮里会長と副会長の私とでお会いしました。当時そこにあったＮＨＫ沖縄放送局の鉄塔が錆びてきたので建て替える計画があり、今度は民放二局も入れて共同三局で新しいテレビ塔を建てるというものでした。しかし、首里城は琉球王国の象徴であり、反対する人もいました。私は、首里城こそ琉球王国のおおもとであり、心の拠り所であるのだから、テレビ塔の建設は今後問題になります、そうお話ししました。

その後、この計画はやはり各方面で問題になり、テレビ局側も事情を了解して首里城跡にテレビ塔が建つ計画はなくなりました。

この会食の際に宮里会長は「大城副会長の言われることも一理ありますね」と、それだけ言われました。それだけですが、実に重みのある言葉でした。西銘知事も宮里会長の意を汲まれて、この件での対処の方針を決められたようです。宮里会長の言葉の重み、これは実に印象深く記憶しています。

最初にお会いになったのは、どういうきっかけからでしょうか？

宮里会長とは、沖縄県観光連盟の運営にかかわるようになったときからのおつきあいです。観光客数がどんどん伸びていった時期で、五十～六十万人規模まではいいが、何百万人となると対応する組織のやり方も違ってきます。県から観光連盟について依頼されたときに、最初は断ったんです。そのときに宮里定三会長から「観光連盟を再建してくれ」と頼まれて、結局引き受けました。

当時は言うことは言うけど、とくに何もしない、あるいは会費を出さない、そんな会員もいましたから。会費を出さない会員がいては財務状況もうまくいかない。株式会社南都からの貸与で一時しのぎをしたこともありました。そういった組織固めみたいなことを中心的にやりました。

観光関係者の集まるパーティーでの一枚。左から2番目が西銘順治知事

とくに海洋博前後の時期はいろいろなご苦労があったのでは？

海洋博の前、昭和四十九（一九七四）年に私は南都の東京事務所を新橋に開設して玉泉洞を売り込むと同時に、本土の生の声、情報を収集していました。だから海洋博の人出は県の予想の三分の一にしかならないと考えていました。あの当時、宿泊業を知らない人たちがジャンジャンとホテルを作っていて、これは危ないなと思っていました。

宮里会長のところにも「ホテルを作ったんだが、

人が来ないんですけど」というトボけたようなことを本気で言ってくる人がいたそうです。

海洋博ショックのときも宮里会長と協議して、新婚旅行を宮崎から沖縄へとシフトさせようという話をしました。戦争時に疎開して宮崎に縁のある私には、ちょっと申し訳ない思いもありましたが。

ミス札幌、ミス沖縄が勢揃いした、札幌観光協会との交流会にて

北海道と沖縄

宮里会長と一緒に観光キャラバンへ行かれたことは?

北海道へ行ったときには、JTBを中心に札幌観光協会との姉妹提携があり、演説を代わりにやってくれと頼まれて代行したりしました。

さっぽろ雪まつりの雪像にシーサーや守礼門が登場した時です。このとき、おみやげで国産ウイスキーを一ケースもらったのですが、当時の沖縄では舶来ウイスキーの時代でしたから口に合わなくて、どうしようかということになりました。宮里会長は「お前がもらえ」と言うが、私もいらない。「じゃ、忘れたことにしておいていこう」と結局その場に置いていったのですが、その後泊まっていたホテルに届けられていました。そんな笑い話もありました。

北海道と沖縄では、観光地として立場的に似ているところは?

そういえば、宮里会長の挨拶のあとに先方の今井会長が「沖縄の観光をみていると、宮里氏のご指導で、こと観光業については、宮里氏はわれわれの兄貴分である。しっかり学んでいきたい」と沖縄を持ち上げてくれました。これに対する答礼で私は「宮里会長は兄貴分だとほめられましたが、札幌は沖縄にとっては親のようなものです。札幌は牛乳でチョコレートやバターをつくり、付加価値をもたせています。こうした産業の実現を学ぶのが、親のうしろについていく子どもの仕事のようなものです」とスピーチしたものです。

沖縄戦の戦死者の出身地では北海道が一番多いんです。だから遺骨収集での支援も大きかった。そんな縁でも沖縄と北海道は結ばれています。

また、ハスカップを食べさせてもらったことがありました。当時ほとんどの人が知らなかったはずです。食べてみたら、酸味がいける。まだ商品化されていない。そこから夢が広がるんです。北海道から学ぶことはまだまだたくさんあります。

最後に、宮里会長のエピソードをもうひとつお聞かせ願えませんか?

宮里会長は独特の歩き方でした。一歩下がって見ているような。いかにも昔のウチナーンチュらしい歩き方だった。沖縄観光の先頭に立ってずっとやってこられ、戦前から観光業についている沖縄で唯一の経験者として知識と誇りをもっておられた。観光連盟やホテル協会をまとめる手腕も確かなものだった。問題点を的確につかみ、組合員とともに猛烈にやっていく、その存在感は大きかったですね。あの時代の状況では「観光の神様」といっていいかもしれません。

宮里会長の識見と手腕が、沖縄観光がここまで盛り上がってきた大きな要因のひとつであったことは間違いないでしょう。

宮里会長の存在感は大きかったと話す大城宗憲氏

[スペシャルインタビュー]

宮里会長の識見と手腕が沖縄観光を盛り上げた要因

Special Interview Soken Oshiro

［ スペシャルインタビュー ］

多くの観光客が訪れるよう県民の参加と協力が必要

ホテルサンパレス球陽館　取締役会長 **金城 幸松 氏**

Profile

1929（昭和4）年、名護市出身。1956（昭和31）年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。1974（昭和49）年に代表取締役社長に就任。現在は取締役会長を務める。2012（平成24）年10月、ホテルサンパレス球陽館は創業65周年を迎えた。

とにかく一徹だった

最初に宮里定三会長にお会いになったのはいつ頃ですか？

宮里会長に会ったのは、海洋博のはじまる二年前です。とにかく観光にかける熱意はすごかった。海洋博のあと、観光客が来なくなって、みんなで観光キャラバン隊を組みました。新潟、富山、東北、北海道。会長に同行して、かなり行きました。今でいうかりゆしシャツをみんなで着ていったから目立ちました。赤いハイビスカス柄だったから、ひと目で『あっ、沖縄からだ！』とわかる。

当時は本当に大変だったようですね。

あの頃はいちばん苦しい時期で、みんなホテルを売ることまで考えていた。たぶん例外なく最悪の事態を想定はしていたんじゃないでしょうか。本当に苦労しました。みんなで協力して、努力を重ねて、どうにかこうにか抜け出しました。宮里会長の熱意、情熱とみんなの協力で、少しずつ回復したんです。

こうしたことは会長の主導と、みんなの協力があったからできたことです。会長の信念はずっと変わらなかった。「沖縄観光は清潔で明るくなくてはいけない」。それはまったく変わらなかった。

現在のホテルサンパレス球陽館（那覇市久茂地）

宮里会長のリーダーシップというのは、どうでしたか？

海洋博前に標準料金を設定することになったのは、ホテル旅館業界以外の人たちが儲けようとしてむちゃくちゃな料金を取ろうとしたから。そんなことをしたら、海洋博のようなお祭りのときはともかく、その後でお客さんが来なくなってしまう。とにかく沖縄の観光を良くする、そのことを会長はずっと考えていました。リーダーシップというか、自分の決めたことを貫く人でした。

会長はとにかく頑固で、意見を変えなかった。ワンマンといってもいいかもしれない。ついていく人はいいけど、そうでない人も結構いたかもしれません。戦前、沖縄ホテルには軍関係のお客さんが多かったからなのか、ちょっと軍隊的でした。上官の命令は聞け、みたいなことはありましたが、その熱意はすごかった。だからこそ、こんなに沖縄の観光も伸びてきたんだと思います。

平成十二（二〇〇〇）年の9・11テロのあとの落ち込みでも、全国キャンペーンを展開しましたが、これも観光連盟を中心としたみんなの力です。

宮里会長の指導力と、みなさんの協力があったのですね。

私は会長に全面協力していました。前のオヤジ（球陽館の創業者・塩浜康盛氏）が宮里会長と仲がよかったの

Special Interview Komatsu Kinjyo

で。私は元々建築士で、ホテル経営なんてやったことがないから、「ホテルのことは定三さんに聞け」ということで、ついていきました。

その頃、できたばかりのムーンビーチホテルの三階の一部を買い取って「ムーンビーチパレスホテル」として、那覇は「サンパレス」として運営して現在までやっています。うちのお客さんはリピーターが多いんです。二か月、三か月と泊まっていく人もいますよ。沖縄観光がずっとこんなに伸びつづけるとは思っていませんでした。

ハワイに学ぼう

宮里会長とはよく一緒に行動されたのでしょうか?

宮里会長に、よくついていきましたね。ハワイにも行きました。ハワイでの研修も、宮里会長のリードではじまりました。ハワイには十五年以上、つづけて行きました。私ぐらいじゃないかと思います、こんなに行ったのは。

日曜日に行われる国際通りの歩行者天国では、多くの県民や観光客が行き交う

沖縄の観光は、ハワイが目標です。観光客数もそうですが、中身も雰囲気もハワイと沖縄は全然違います。ハワイでは観光業とは関係ない、パイナップル畑で働いている人が、私たちにニコニコ手を振ってくれるんです。それはもう、嬉しいなんてもんじゃない。観光に来てくれている人を、普通の人が本当に心から歓迎してくれているんです。一般の人がみんなですよ。その点、沖縄は、まだまだです。

沖縄の観光客数も年間七百万人をこえましたが、まだまだですか?

ハワイに学ぼう、というのが会長の考えでもあり、私たちの思いです。とにかくソフト面ですね。ハワイはみんなが観光に特別の強い思い入れを持っていました。ハワイにとってはそれだけ「観光がいかに大事か」という認識があり、沖縄とは違います。沖縄にはそういう認識がまだ足りません。観光は業界の人たちがやるもので自分たちは関係ない、というような考えでは観光客を歓迎する雰囲気はなかなかできません。

ハワイの観光客はざっと八百万人、それも滞在型です。毎年のようにやってきて、ゆっくりしていくファンが世界中にいます。沖縄はまだ七百万人、二日で帰ってしまう人も多い。

ハワイでは観光関係者はもちろん、農業をやっている人まで観光客を見かけたら手を振ってくれたりするわけです。島全体で歓迎しているのが、よくわかります。沖縄を訪れる観光客は、県民を見ています。みんなで歓迎する雰囲気づくりをしないと、ハワイのようにはなりません。そうしたムードづくりの面では、沖縄はまだまだです。

これからの沖縄観光にとって大事なものは、今言われた全員での雰囲気作りのほかには何があるでしょうか?

たとえば、国際通りで実施されている日曜の歩行者天国は素晴らしいですね。住民も観光客も自然に楽しめる。子どもたちが遊んでいる姿とか、いいですねえ。「いちゃりばちょーでー」というホスピタリティは沖縄の方が上かもしれない。沖縄独特のおおらかな気持ちがあれば、ハワイのような世界中からお客さんがやってくる観光地になる日も遠くないかもしれません。

沖縄観光がもっと発展するには、県民の協力が不可欠と話す金城幸松氏

宮里会長も、ハワイを目標にしてきたのは沖縄と似た部分が多いこと、とくに旅行客を大事にする心持ちをずっと沖縄の人が持ち続けてきたことが根底にあったのではないでしょうか。そして沖縄はなにしろ治安がいい。他のアジアの都市と比べたら段違いです。夜も安心して女性も子ども出歩ける街なんて、世界ではそんなにありません。こんな利点があるんですから、沖縄にもっともっと観光客を呼べるはずですし、そのためには沖縄県民ひとり一人の気持ちが大事なのではないでしょうか。

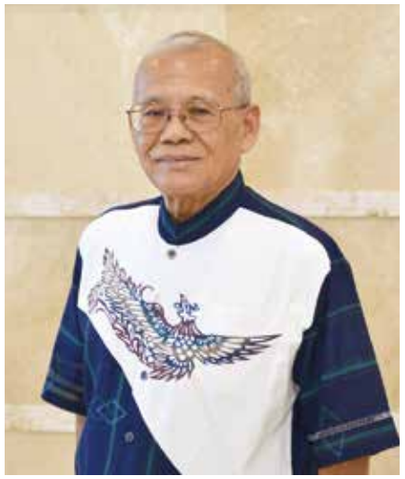
[スペシャルインタビュー]

多くの観光客が訪れるよう 県民の参加と協力が必要

［ スペシャルインタビュー ］

宮里会長の人生に学び一途に一念を通す

沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合 元専務理事 **大城 吉永 氏**



Profile

1936（昭和11）年、南風原町出身。1968（昭和43）年、那覇市観光ホテル旅館協同組合・事務局長、1992（平成4）年、沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合・専務理事を歴任。2008（平成20）年には、沖縄県観光功労者表彰を受賞した。

信念の人

宮里定三氏との出会いを教えてください ますか？

昭和四十四（一九六九）年ですね。私が当時まだできたばかりの沖縄観光ホテル旅館協同組合の事務局長に就任を要請されたときのことです。

宮里会長には観光を盛んにするのは沖縄のため、という信念がありました。「沖縄は昔、六十万人しか食っていけない島だったんだよ」と。かつての海外移民の苦労、悲しい歴史を現場で見聞きしておられたから、説得力がありました。「これから百万沖縄県民のために基地に代わる産業を育てなければいけない、それは観光しかない、そういう心づもりで一緒にやってくれないか」とそれはもう、あふれるような熱意に打たれましてね。私は二つ返事で引き受けることにしました。

実は私は当時から禁酒をしていまして、お酒のつきあいができない。そうすると会長は、「あんたは飲まんでいい。私が飲むから」と、そんな役割分担までしてくださいました。とても愛妻家でしてね、どんなに泥酔していても、帰宅した途端にシャンとして「かあちゃん、帰ったよー！」と声をかけておられました。

宮里会長の「覚悟」

海洋博の頃には、大変なご苦労をされたと聞きました。

海洋博のときはホテルや旅館の建設ラッシュで、法外な宿泊料金を取ろうとするところが出てきました。宮里会長は「いっぺんに儲けようと思ったら、いっぺんに駄目になる。海洋博以後もやっていける料金でなければならない」と、みんなで話しあって一泊二食で七千～八千円という基準を決め、文書で「標準料金」として出したんです。すると、「協定した料金は独占禁止法違反になる」と沖縄総合事務局公正取引室の調査がホテル組合に入ったんです。私はたまたま東京に出張中で、急いで帰りましたが、大変な騒ぎでした。

県外でもかりゆしウェアを着用するようにと宮里会長から言われていたそうだ

かりゆしウェアを着た宮里会長を囲んで

宮里会長は「沖縄観光の将来のために設定した料金だから、撤回しない。万一の場合はオレが刑務所に入ってもいい」と折れず、結局三か月も公取委と喧嘩しました。「会長が刑務所に入るなら、自分もか」と、一時は私も覚悟を決めました。結局、東京の公取本部から会長と私が呼び出されて「復帰して間もないことだし、今回は処罰をしないから、文書は破棄してほしい」と懇請されて、結局罰則なしで文書を破棄して決着しました。

そんな宮里会長のエピソードをいくつかご紹介願えますか？

ＧＤＰの約二十五％が米軍基地関係だった時代に、観光こそが沖縄を支える産業になるというのはまさに宮里会長の先見の明でした。

また、とにかく挨拶、お話が抜群にうまかった。いつも新しい話をして、同じ話を繰り返さない。そのために新

Special Interview Yoshinaga Oshiro

聞、週刊誌をはじめ世の中の動きをつねにキャッチしていました。会長がお話をされるときには、理事のみなさんが「今日はどんな話か」と楽しみにしていました。

朝は起きたらストレッチ。宿泊先のホテルでも、必ずです。ウォーキングは与儀公園を二周。テレビでは「水戸黄門」が大好きでした。好きな食べものはヤギ汁、沖縄そば、ピザ。勘定になると財布をそのまま私に預ける太っ腹でしたが、小銭が入っていないので、ときどき私が自腹を切りました。

国内だけでなく、海外にも同行することが多かった。北欧を訪れたときの一枚

今となっては笑い話です。

明治生まれですが、身のまわりのものは自分で揃えていました。ハワイに行くと毎回必ず帽子とアロハシャツを買っていましたね。年に三回は海外旅行で世界各地へ行きました。人材育成のために各ホテルの支配人達を連れて行くことが多かったですね。

八十七歳まで現役でした。八十八歳のお祝いを観光関係団体でやろうと、みんなで語っていた矢先に逝去されたんです。三月四日でした。五月十九日が誕生日でした。

かりゆしウエア普及のために

サミットの前年ですね。そのサミットでかりゆしウエアが話題になり、いまの隆盛のきっかけになりました。

ハワイのアロハシャツから発想を得て、いまのかりゆしウエアの原型となる「おきなわシャツ」を発売したのが昭和四十五（一九七〇）年です。赤いハイビスカス柄と、青で龍樋と守礼の門をデザインしたものの二種あったのですが、宮里会長が赤を推しましてね。派手だから恥ずかしかったんですけども。このときは割高感がありました。

会長は「安物は売れない、五ドルにしなさい」と。当時ホンコンシャツは二ドルでしたから、本当は三ドルで売りたかったんですが。

このおきなわシャツの試作品を着て、私自身が広告塔になりました。なにしろ〝会長命令〟です。当時、小五の娘が「学校におきなわシャツを着てこないで」と言うんです。どうして？と理由を聞くと「ちんどん屋みたい、って言われた」と。そこで娘に私はこう言いました。「ちんどん屋は宣伝をする、立派な仕事だよ。お父さんは沖縄の観光を宣伝するちんどん屋なんだ」と。娘が私の気持ちをわかってくれたのかどうか、高校生の頃にはアイロンをかけてくれるようになりました。

平成二（一九九〇）年、県の観光課が「かりゆしウエア」と名称を統一しました。十年前からようやく黒字になってきたところです。これは儲けのためでなく、あくまで普及のためにやってきたことです。

宮里会長の思い出を懐かしそうに話す大城吉永氏

会長は「一千万円はつぎこめ」と言っていました。会長は沖縄サミットの前年に亡くなられましたが、沖縄県に三十着を寄贈して、知事から「サミットで着て」とアピールしてもらったりしました。

成功するまであきらめない、まさに「一徹」ですね。

私のふるさと南風原町神里の人は「かんざとかんさーマーチヌニーグイ（神里の人は、松の根っこのように意志が固い）」と言われています。今まで毎日かりゆしウエアを着続けてきた私は、ふるさとのこの言葉にずっと励まされてきました。思い込んだら一途に一念を通す。宮里会長に人生のお手本を学び、実践してきました。

[スペシャルインタビュー]

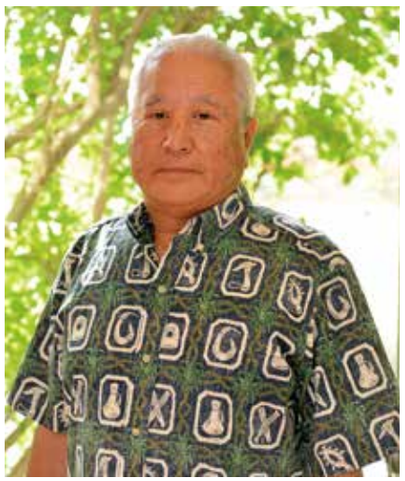
宮里会長の人生に学び 一途に一念を通す

Special Interview Yoshinaga Oshiro

［ スペシャルインタビュー ］

沖縄観光の発展を願った父・宮里定三の想い

沖縄ホテル 代表取締役社長 **宮里 一郎 氏**



Profile

1947（昭和22）年、名護市真喜屋出身。1993（平成5）年、沖縄ホテルの代表取締役社長に就任。那覇市観光ホテル旅館事業協同組合や沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合の理事長、近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟沖縄連合会・連合会長、JTB協定旅館ホテル連盟沖縄支部・相談役なども務める。

父の素顔

いちばん身近でご覧になった宮里定三氏の素顔がうかがえるようなエピソードをお聞かせいただけますか？

父・宮里定三は、ゴルフが好きでした。ゴルフを覚えたのは、沖縄ホテルができたばかりの頃、お客さんから教わったようです。沖縄カントリークラブのロッカーのナンバーは今も「2」ですから、創設以来の会員なんです。しかし、沖縄の本土復帰以降、お付き合い以外はほとんどやらなくなりました。

私の祖父（定三氏の父）は元郵便局長でとてもきちんとしていました。沖縄ホテルでは総務・経理を担当し、きれいな字で記録を整理したり、人の出入りをよく見ていて、ちょうど「主」のような存在感があり、筋が一本通っていました。父は飲むのも食べるのも早く、よく泥酔して帰っては祖父に叱られていました。日本酒が大好きで、神戸時代灘のお酒に親しんだのでしょう。ウイスキーなら角、米軍のバーで覚えたバーボンジャーやマティーニ。ですが、晩年はみごとに健康管理をして、九十キロ近くあった体重を六十九キロにまで落としました。それと、ふるさと真喜屋への思い入れは強かったですね。

「ハワイの恋」から始まった

定三氏がふるさと真喜屋から神戸の「ゑびす屋」に行かれた経緯や、その頃の様子について教えていただけますか？

父の伯父である宮里貞寛は、私には大伯父にあたりますが、ハワイに移民して、そこで出会ったのが神戸「ゑびす屋」のお嬢さんでした。父・定三のふるさとは羽地村真喜屋、いまは名護市ですが、ここにはキリスト教会がありましたので、ハワイの教会が出会いの場所でした。クリスチャン同士で愛を育んだようです。いってみれば「ハワイの恋」が沖縄ホテルの生みの親かもしれません。

「ゑびす屋」は、旅館業とは言っても移民専門の旅行社のようなものでした。当時、海外渡航の窓口は横浜か神戸で、沖縄からの移民のほとんどは「ゑびす屋」でお世話になったそうです。手続きも簡単ではなく、長い人はビザ取得まで二か月かかったといいます。まず、方言でない標準語で読み書きできることが条件で、伝染病をもっていない、犯罪歴がないなど、いろいろな書類を揃えないといけません。さらに、大使館の担当者や領事を接待するといった苦労があったようです。父の兄弟のうち、三人は神戸へ行って「ゑびす屋」で仕事をしていました。

家族でハワイを訪れたときの一枚

戦前、最初に沖縄ホテルを建てた時のことをお聞かせください。

沖縄ホテルは日本軍や沖縄県からの要望や応援でできたわけで、融資や物資の調達なども優遇されていました。場所は、いまの護国寺の向かいあたりにありました。「ゑびす屋」で働いていた父の妹なども神戸から呼んでスタッフになってもらい、従業員は親戚や故郷である真喜屋出身の人たちや、身元

Special Interview Ichiro Miyazato

のしっかりした子女が中心でした。

沖縄ホテルには「沖縄初」がたくさんあるんです。電気冷蔵庫、地下室、水洗トイレなどがそうで、小中学生が見学に来ました。昭和十八(一九四三)年からは日本軍の施設のようになり、機密保持が厳重になりました。

当時、父は軍人から「戦争に勝ってニューヨークを取ったら、一等地のどこでも好きなところをお前にやる」と言われ、長い間本気にしていました。その頃は、日本が負けるなんて夢にも思わなかったのでしょう。

実は、父のニックネームは「一郎」だったんです。奉公では入った順番に名前がつけられるので、父の兄(次男)は「五郎」でした。父は戦前からの友人に「イチロー」と呼ばれていました。

1992(平成4)年7月、当時、沖縄開発庁長官であった伊江朝雄氏が沖縄ホテルを来訪。定三氏の後方に立つのは、現・沖縄県知事の翁長雄志氏

私が電話を取ると、「イチローはいるか、いやお前じゃなくてオヤジの方」と言われたりしたものです。

沖縄戦では、着のみ着のままで逃げたと聞いています。沖縄ホテルは軍の関連施設とされたのか、真っ先に爆撃されたようです。戦後、昭和二十～二十五年くらいまでは真喜屋で、軍や基地の仕事などをして、軍の売店、PXの班長などもしていました。ホテルをやる話が来た時には、「まだホテルをつくるには早いか」とかなり迷ったようです。その当時、昭和二十六(一九五一)年あたりから芸能人が沖縄に来はじめて、諸方面からの応援もあり、決意したようでした。

戦後の沖縄ホテル

最初は東芝、日航、時事通信、東京食品、南方連絡事務所などの支社長や社員らが年単位で住むような、まるで社宅のような感じでした。私は昭和二十二(一九四七)年生まれですが、この頃住んでいた駐在員や支社長の暮らしの贅沢さが印象に残っています。琉球政府の行政主席の月給が三百ドルくらいのときに、海外赴任手当などでおそらく五百ドル以上はもらっていたのではないでしょうか。みなさん、とても海外通で粋でした。コカコーラ、ゴルフ、オートミール。この時に、海外、とくにアメリカの文化に触れた驚きは今でも覚えています。

戦後の沖縄ホテルは、文化人がよく宿泊されていたとか。

文春講演会というのがありましてね。思い出してみただけでも、棟方志功、三浦朱門、曾野綾子、山下清、吉川英治、陳舜臣、澤地久枝……。文豪や芸術家にたくさんお泊まりいただいています。

あとはやはり慰霊参拝の方が多かった。しかし、まだまだ沖縄に観光旅行にたくさん来てくれるような時代ではありませんでした。

父・定三氏について、感慨深く静かに話す一郎氏

だからこそ、ホテル旅館組合では、定三氏の役割が大きかったんですね。

ホテル旅館の組合というのは、組合に入っても客が増える訳ではないんです。組合の会員の勧誘が大変でして、入ってくれても二年目以降は会費不払いがよくありました。ホテル同士の協力体制というのは、陳情や要請での力、役所への対応で必要になってきます。たとえば、リザンシーパークホテル谷茶ベイが海外の投資銀行からの買収に抵抗して訴訟を起こしたときには、証人として地元雇用への貢献などを証言しまして、そのおかげかどうかはわかりませんが、勝訴になったこともあります。こうした裁判のサポートなども、組合があってこそです。

全国でも多くの旅館・ホテルが苦境になり、旅館数が減少しています。そうした情勢のなかで、今でも月に一回理事会をやって、きちんと運営している沖縄は珍しい例に入ります。これも、父の残した遺産の一つでしょう。

[スペシャルインタビュー]

沖縄観光の発展を願った父・宮里定三の想い

Special Interview Ichiro Miyazato

敬愛する宮里定三先輩を偲ぶ

沖縄観光コンベンションビューロー
元会長　平良 哲
Tetsu Taira

今年は戦後70年の節目の年であり、沖縄も本土復帰43年になる。復帰の年、観光客は44万人、現在は775万人と驚異的な伸びを示している。観光客の同行も当初は戦跡めぐり、修学旅行も平和学習からスタートした。

今日では、海洋博記念公園や首里城も復元され、多くのホテル・リゾートホテルが建設され、観光施設も充実強化されてきた。玄関口の那覇空港ターミナルビルや国際線ビルも新築され、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催の年には、第2滑走路も竣工する。港もクルーズ船が増えて、今年は前年比52・5%増の247回の寄港で過去最多となる見込みである。アジアのマイアミをめざして、受け入れ体制の充実強化を図っている。このような好調な観光客のニーズに応えるために県も「21世紀ビジョン」を作成し「2020年の観光客1000万人と1兆円の観光収入をめざす計画」を強力に推進している。

現在の沖縄は「基地の島」から「観光の島」へと大きな変貌を遂げつつあり、日本のフロントランナーとして期待されている。観光は「平和産業のチャンピオン」である。

今日の沖縄観光の原点や基礎づくりを強力に推進して下さった方が宮里定三先輩である。長年にわたる沖縄観光協会長としての実績は、枚挙にいとまがない。現在、沖縄観光の中核的な推進機関として「沖縄観光コンベンションビューロー」がある。これまで多くの観光団体があり、組織的な統一性もない状況の中で、いち早く観光業界の効率的な整理統合を図り、強力な組織づくりを提案して今日のOCVBを立ち上げた最大の功労者であると言える。今回、観光業界の有志の皆さんが、宮里先輩の記念誌と胸像を建立する計画が進められている。時宜を得たすばらしい事業であると心から嬉しく思う。

今年は観光の先進地であるハワイと沖縄が「姉妹都市締結30周年」を迎えた記念すべき節目の年である。移民の父と呼ばれている當山久三は「いざ行かん我らの島は五大州」という名言を残し、ハワイ沖縄センターには像が建てられている。當山久三が「移民の父」なら、宮里定三は「沖縄観光の父」である。

観光関係有志の皆さんが宮里先輩の胸像を建立する計画は業界あげて全面協力し、その功績を顕彰して今後の観光発展の礎にしたい。

本土の観光関係の皆さんとの一枚

平良　哲
1936(昭和11)年、那覇市出身。沖縄県議議員4期16年、自由民主党沖縄県連幹事長、沖縄県観光連盟専務理事、沖縄観光コンベンションビューロー会長、トロピカルテクノセンター副社長、那覇空港ターミナルビルディング社長、沖縄ダイケン社長など要職を歴任。

沖縄県観光連盟の忘年会にて

願わくば

沖縄観光コンベンションビューロー
前会長　上原 良幸
Yoshiyuki Uehara

副知事職を最後に40年間の県庁生活を終え、ＯＣＶＢ会長に就任した。直前まで観光部門を所管していたことから、いろんな行事・イベントへの参加を通じて、多くの関係者と沖縄観光を取り巻く話題に花を咲かせたものだ。

すなわち、全国でダントツの観光予算を活用して誘致活動を展開すれば、入域客の増加、特に海外観光客の大幅増が期待できる。これで名実ともに観光は沖縄の基幹産業だ。そのためにも、交通インフラ等を充実させ、県民のコミュニケーション能力を向上させるなどハード・ソフト両面の整備を図るべき云々。

ＯＣＶＢ会長に就任してすぐ、その認識の甘さを思い知らされた。いまや沖縄観光の勢い・加速度は予想をはるかに超えており、受け入れ条件の整備は待ったなしの対応を迫られているのだ。

こうした現状や課題等に関して認識を共有すべく、まずは最前線で頑張っておられる業界関係者のお話を拝聴することとした。傾聴すべき人物として最初に名前が挙がった宮里一郎氏は、旅館ホテル業界のまとめ役にふさわしく大局的な見地から積極的な意見を述べられた。その際、笑顔を絶やさない気さくな応接で、新参者の私を気持ち良く遇していただいた。氏が、沖縄観光草創期の大立者・宮里定三さんのご子息と伺い、恰幅の良さとホテル経営者としての誇りは先代から受け継いだ血筋だろう、と推察した。

父君定三さんは、今日の沖縄観光発展への道を切り開いた業績とともに、数々の武勇伝やエピソードに包まれた魅力溢れるリーダーだったと何度も耳にした。これら生前の活躍ぶりを見聞きできなかった私にとって、その人物像に触れることができる本書の刊行はありがたい。

１９４１年開戦直前にホテルを開設したことに驚き、宿泊客への配慮を怠らずとしてホテル内に自宅を構えたことに感心した。そして「かりゆしウェア」の生みの親であることに敬意を表したい。本書で明らかにされるこうした発想や行動は、沖縄観光の転換期に立たされた我々に多くの示唆を与えてくれるに違いない。

お会いしたことがないので勝手な想像になるが、宮里定三さんの風貌や立ち振る舞いは、私の好きな歌「風に立つライオン」をイメージさせるのだ。願わくば、その謦咳に接してみたかった。

上原　良幸
１９５０（昭和25）年、那覇市出身。１９７３（昭和48）年、沖縄県庁に入庁。学術振興室長、国際都市形成推進室副参事、企画部長、知事公室長を歴任し、２０１０（平成22）年、副知事に就任。２０１３（平成25）から2年間、沖縄観光コンベンションビューロー会長を務めた。

1996（平成8）年6月に開催された「OCVB発足記念の夕べ」での一枚（写真提供「オキナワグラフ」）

宮里定三先生を偲んで

劇作家・プロデューサー　亀島 靖

Yasushi Kameshima

私は、あえて先生と呼ばせて頂きます。観光、イベント、コンベンションと、私が関わった分野でその真髄を教えていただいた師が宮里先生です。最初にお会いしたのは、昭和六一年、約三十年ほど前になります。私が沖縄コンベンションセンターに入職した頃で、先生は理事を務めておられました。

当初、観光界のドン(?)と言われていた先生は、周囲を圧するような一見恐持ての顔をされ、側に近づくことも恐れ多い存在感でした。しかし、ときおり破顔一笑されると何とも言えない優しさと親近感を覚えたものです。その後お話をさせていただく機会がふえ、時たまホテルの社長室にもお伺いしご教示をいただくようになりました。

平成十年、私がコンベンションセンターを離職した時。ある日、社長室でコーヒーをいただいていると、先生が「君は観光やイベントをやっているが、まだハワイに行った事がないとは情けない」と叱られ、やおら机の引き出しから赤い封筒をとり出し手渡されました。それは、ノースウエスト社のハワイ往復券でした。「これでハワイを見て来なさい。その代わり帰ってから感想を報告しなさい」とのことでした。また、初心者の私のために、さる旅行代理店の課長を添乗手配していただきスムーズな旅ができました。先生の暖かい細心な配慮に感激し毎晩報告書のメモを書いたのは生涯忘れえぬ思い出となっています。そのお蔭で、「濃厚なハワイの海よりも、沖縄の色鮮やかな七色のコバルトブルーの海。単調なポリネシアンダンスよりも、重厚な宮廷舞踊を含む琉球伝統芸能の芸術性」が優れていることを実感しました。

先生からいろいろ教示いただいたなかに、「沖縄の宝」があります。先生が若かりし頃、戦前初のホテル・沖縄ホテルに勤務された折、尚順男爵とお会いした時に、「沖縄の宝は三つある。それはサンシン、豚肉、泡盛である」と教わられたとのことです。沖縄の伝統芸能、長寿食文化、古酒としての泡盛の価値、これらの宝は、現在沖縄観光を支える柱となっています。以来、先生は沖縄観光のソフトとして、沖縄文化を継承し観光商品化する事の重要性を、私達後輩に伝えてこられました。私も講演や研修の際、観光業に携わる若い人達に先生の教えとして「沖縄の宝」を話すようにしています。

さらに先生が懇意にされていた宮崎観光の父・岩切章太郎氏の言葉も教わりました。

「行ってみたい。来て、良かった。また、来たい」。この中には観光業に関する誘客、宣伝。観光客の満足感。また、リピーターの拡大へと、観光業の全てが集約されています。この考えはこれから先においても観光事業者のモットーとなる指針と言えます。

先生の功績は、かりゆしウェアの発想、コンベンションビューロー創設、観光議員連盟創立等、ま

美しく整備されたハワイには、日本人をはじめ世界各国の観光客が訪れる

本部半島と屋我地島に囲まれた羽地内海（C）OCVB

た私の知り得る範囲を超え、先生は海洋博後の厳冬期の観光振興、那覇空港の拡充、キャリア、エージェントの折衝等、国や県を相手に八面六臂のご活躍をされました。観光のハード、ソフト部門において先生の立てられた金字塔は現在も、産官学界に大きな影響力を与えています。

反面、少年の様なロマンを持ちあわせた方でした。「私の夢は、多野岳にケーブルカーを架けることだ。景色においては日本三景の松島より羽地内海の方が素晴らしい」と語る時の先生の目は、眼鏡の奥で輝いていました。現在、私も観光産業に携わっていますが、観光に従事する後輩たちに先生から教わったことの一端でも伝えればと思っています。宮里定三先生。本当にありがとうございました。また、今回、先生についてのこの機会を与えていただいたことを感謝します。

亀島　靖
1943（昭和18）年、那覇市出身。文化放送、ラジオ沖縄に勤務後、沖縄県商工労働部県民会館建設室企画課長、財団法人沖縄コンベンションセンター事業課長、財団法人沖縄観光コンベンションビューロー・コンベンション室長、副館長を歴任。主な著書に『琉球歴史の謎とロマン1～3』、琉球新報　新聞小説『三十六の鷹』など多数。

沖縄観光に生涯をかけた宮里定三氏

ロワジールホテルズ沖縄
元専務取締役総支配人　新城 朝吉
Chokichi Shinjo

世界のホテルの歴史を語る時、ホテル王と言われたセザール・リッツをはじめエリスウオス・ミルトン・スタットラー。それに、コンラッド・ヒルトンの三人の偉大なホテルマンを知らずしてホテルを語る事はできない。同様に、沖縄の観光の歴史を語る時に宮里定三氏を抜きにしては沖縄観光問題を語る事はできない。

宮里定三氏の沖縄観光に対する功績は、私の十本の指では数えきれないし、また限られた紙面でも書きつくす事ができないほど枚挙にいとまがない。観光業界に身を置いてきた一人として過去を振り返りながらその一面を記述してみたい。

ホテル旅館業の組織化に取り組む

昭和三十五年、沖縄県の入域客数は二万八〇〇名でホテル旅館は二十二軒であった。定三氏は、受け入れ態勢の整備を図る為「那覇市ホテル旅館組合」を結成した。また、昭和四十三年には「沖縄県ホテル旅館協同組合」、昭和四十九年には、「沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合」も結成され、定三氏が理事長を務めた。昭和四十七年五月十五日、祖国復帰が実現し、入域客数が前年比二〇〇倍となった。各ホテルとも満員という時、定三氏は組合員を集め宿泊割り当てや料理メニューの献立等についての会議を行い、会長として指導力を発揮した。ホテル旅館の必需品の協同購入や宿泊約款を作成し、旅行業社との双務契約を締結し誘客宣伝活動を展開したのもその頃である。昭和五十年、海洋博の開催によって県内への観光客は大幅に増えたものの、終了と同時に客数は激減

タヒチ・モーリア島にて。1982（昭和57）年8月

し、ホテル旅館の閉鎖が続出した。

定三氏は、その危機を突破するため、国や県、金融機関に対し様々な陳情を行った。例えば、「ホテル旅館への資金手当に対する陳情」「県や市町村に対して宿泊施設の救済に関する陳情」「固定資産税の特別措置に関する陳情」等である。我を捨て組織のため奮闘している姿には、常に感銘を受けたものである。

かりゆしウエア普及に奔走

昭和四十二年、定三氏は観光業界を代表してハワイの観光視察を行い、観光先進地ハワイで学んだ事を沖縄で実現する事を考えた。青い海、青い空、南国沖縄を演出するために考えたのがハワイで見たアロハシャツだった。昭和四十五年、社団法人沖縄観光連盟会長に就任した定三氏は、公募を行い沖縄シャツを作成した。ハイビスカス柄にＯＫＩＮＡＷＡのロゴマークが入った赤とブルーの二種類で、デパートとタイアップして販売したものの販売不振で、在庫品は全部ホテル組合で買い取り、会員のユニフォームとして活用した。これが、かりゆしウエアの始まりである。その後は、省エネタイプのトロピカルウエアとか、サファリタイプが出たが中々普及しなかった。長い間足踏み状態が続いた。

平成元年、観光連盟にトロピカルリゾート沖縄の演出のため「めんそーれ沖縄県民運動推進協議会」が発足し、沖縄らしいウエアの推奨普及運動が決定され、同年五月には、ウエアの名称が「かりゆしウエア」と決定した。

平成七年には、ホテル組合でも「美ら島沖縄観光立県宣言」を行い、かりゆしウエア普及着用運動を展開し、県民の夏場のウエアとして広く愛用され好評を得る様になった。平成十一年には、沖縄県議会や那覇市議会でもかりゆしウエアが着用され、さらに県民への広がりが増した。その後、平成十二年には九州沖縄サミット首脳会議が開催され、各首脳がかりゆしウエアを着用したためにウエアの知名度が上がり、加えてＮＨＫドラマ「ちゅらさん」の放映によって沖縄ブームが到来し、全国的にかりゆしウエアの愛用者が増え今日に至っている。

定三氏の長年に渡るかりゆしウエアに対する情熱と新年が実を結んだといえる。定三氏は、常々県民の大半がかりゆしウエアを着用すればハワイに追いつくという事が口癖だった。

観光人材育成基金の創設

定三氏は、日頃から「誘客活動と人材育成なくして沖縄観光の発展はない」と話していた。日本交通公社協定旅館連盟（公旅連）沖縄支部が沖縄にできたのは、昭和四十七年である。その際も、定三氏は支部長として次の様に挨拶されている。「沖縄観光発展のため全力を上げて寄与したい。そのためには、施設の改善とサービス向上の強化を図るため人材の育成に力を入れたい」支部長方針のもと、公旅連主催の研修会が始まったのは昭和四十八年であり十二月で三泊四日の研修を行った。その後も再々続けられ、またホテル組合でも青年部研修は続

ボラボラ島での一枚。1982（昭和57）年頃

けた。その他にも各旅行者と協定したホテル旅館連盟沖縄支部等が主催する海外研修を毎年行っていた。私も、機会のあるごとに参加し見聞を広げる事ができ感謝している。

観光人材育成で何よりも特筆すべきは、厚生労働省所管の沖縄職業能力開発大学校（ポリテクカレッジ）に「ホテルビジネス科」が開設されたことである。学科設置の背景には、定三氏の並々ならぬ努力があったことを後日聞かされ改めて敬服し、非常にうれしく感じた。また、ホテルビジネス科に入学した生徒のため人材育成基金を活用した生徒は、卒業後ホテルに就職して分割払いで返済するというシステムは、生徒をはじめ父兄を感激させた。その創設資金も各企業を廻って集めた基金で「宮里基金」と呼ばれている。このように定三氏の人材育成にかける信念は晩年まで続けられた。

沖縄観光の生みの親・育ての親

定三氏は、沖縄の観光という名の付く団体すべての会長職、理事長職を歴任されていた。それも、自分から希望したのではなく会員から推薦され断れずに引き受けられたものである。それだけ信望の厚い方で、皆の意見を真摯に受けとめ大所高所から考えて行動する方だった。

私は何度か海外研修旅行や国内キャラバンに一緒させてもらったが、いつでも前向きに沖縄観光の夢を語っていたのが忘れられない。特に、前述したかりゆしウエアの話になると熱が入り、娘の結婚式の引出物や母親のトゥシビーの返礼にもかりゆしウエアを使ったという話は今も脳裏に残っている。

晩年になってからのことだ。「新城君、自分はもう減価償却も済んでいる。旅行社に言いたい事があれば自分が皆の代わりに何でも言ってあげるから自分に言ってきなさい」と言う言葉だった。ホテルと旅行社との関係は車の両輪に例えられるが、実際は送客側と受け入れ側では若干のギャップがあって建前は対等であっても本音はちょっと違っており、定三氏の言葉はそれを察してのことだった。心からありがたく思ったものである。

定三氏は、若い我々にもやさしく思いやりの深い方で、観光の先生、いや、人生の大先生だった。定三氏の在りし日の後姿は、私たちに語ってくれた。「若い君たちがこれからの沖縄観光のために頑張るんだぞ」と・・。

沖縄観光に生涯をかけた定三氏は、沖縄観光の生みの親であり、育ての親でもある。心から尊敬し感謝を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。

新城　朝吉

1941（昭和16）年、平良市出身。八重洲セントラルホテル専務取締役、沖縄県人材養成センター代表取締役を経て、1993（平成5）年、ロワジールホテルズ沖縄専務取締役総支配人。沖縄観光産業研究会副理事長、2006（平成18）年、万国津梁館の館長も務める。観光功労で2002（平成14）年、那覇市長賞、2003（平成15）年に県知事賞を受賞。

年表

沖縄観光史関連

大正十（一九二一）年	皇太子（後の昭和天皇）来県
大正十四（一九二五）年	沖縄神社拝殿（首里城）が国宝に指定
昭和十一（一九三六）年	沖縄観光協会設立
昭和十二（一九三七）年	大阪商船が神戸から沖縄へ七泊八日のツアーを実施
昭和二十（一九四五）年	沖縄戦終結、沖縄は米軍占領下に置かれる
昭和二十三（一九四八）年	球陽館（現・ホテルサンパレス球陽館）が開業
昭和二十四（一九四九）年	沖縄から日本本土への旅行が許可される
昭和二十五（一九五〇）年	ハワイ在住の県人会による沖縄観光慰問団が来航
昭和二十七（一九五二）年	琉球ホテル（後の琉球東急ホテル）が開業
昭和二十九（一九五四）年	沖縄観光協会発足
昭和三十（一九五五）年	那覇国際空港ターミナルビル完成
昭和三十一（一九五六）年	南部戦跡巡り観光バスが運行開始
昭和三十三（一九五八）年	沖縄の通貨がB円からドルに切り替え
昭和三十四（一九五九）年	那覇市観光ホテル旅館組合設立
昭和三十五（一九六〇）年	日本交通公社京都駅前案内所から沖縄訪問団が来県
	琉球政府工務交通局陸運課に観光係設置
昭和四十二（一九六七）年	第一回観光宣伝隊の派遣
昭和四十三（一九六八）年	沖縄観光開発事業団、沖縄観光ホテル旅館協同組合、沖縄県観光連盟が設立
昭和四十五（一九七〇）年	海中展望塔（現・ブセナ海中公園）オープン「おきなわシャツ」（後のかりゆしウエア）を発売

宮里　定三

明治四十五（一九一二）年	沖縄県羽地村真喜屋（現・名護市真喜屋）に生まれる
大正八（一九一九）年	稲嶺尋常高等小学校に入学
昭和二（一九二七）年	稲嶺尋常高等小学校を卒業
昭和六（一九三一）年	神戸ゑびすや旅館本店に入社
昭和十（一九三五）年	ゑびすや旅館栄町支店長に就任
昭和十六（一九四一）年	沖縄ホテルを設立、総支配人に就任
昭和十七（一九四二）年	沖縄ホテル正式オープン
昭和二十三（一九四八）年	羽地村真喜屋区長に選出
昭和二十五（一九五〇）年	沖縄観光協会理事に就任
昭和二十六（一九五一）年	沖縄ホテルを再建
昭和二十九（一九五四）年	沖縄ホテルが沖縄観光協会指定旅館に選定される
昭和三十二（一九五七）年	沖縄の旅館ホテル業者十六業者と本土視察
昭和三十五（一九六〇）年	那覇市観光ホテル旅館組合設立、組合長に選任される
昭和三十八（一九六三）年	那覇市商工会議所常議員に就任
昭和四十三（一九六八）年	米国民政府により国民指導員としてアメリカへ派遣される
昭和四十四（一九六九）年	沖縄県赤十字社より地域活動への貢献に対して表彰される
昭和四十五（一九七〇）年	沖縄県観光連盟会長、那覇市観光協会会長に就任

昭和四十七(一九七二)年	沖縄が日本に復帰、沖縄県誕生 通貨がドルから円に切り替え
昭和四十八(一九七三)年	沖縄県リゾート開発公社設立
昭和五十(一九七五)年	沖縄国際海洋博覧会開催 ホテルムーンビーチ開業
昭和五十一(一九七六)年	観光振興局設置 沖縄県観光開発基本計画策定
昭和五十二(一九七七)年	GIT(団体包括旅行割引)運賃が沖縄線に導入 北海道へ観光宣伝隊を派遣
昭和五十三(一九七八)年	交通法規変更(七三〇) 沖縄県観光連盟と札幌市観光協会が姉妹提携
昭和五十四(一九七九)年	沖縄県観光振興条例制定 日本ハムファイターズ沖縄キャンプ開始
昭和五十七(一九八二)年	適マーク交付問題
昭和五十九(一九八四)年	第一回NAHAマラソン開催
昭和六十(一九八五)年	第一回宮古島トライアスロン大会開催
昭和六十一(一九八六)年	熱帯ドリームセンター開園 沖縄コンベンションセンター設立
昭和六十二(一九八七)年	オキナワコンベンションビューロー設立 沖縄コンベンションセンター展示棟と会議棟が完成
昭和六十三(一九八八)年	航空機利用の修学旅行に国庫補助が可能に めんそーれ沖縄県民運動推進協議会発足
平成元(一九八九)年	「かりゆしウェア」に名称統一
平成三(一九九一)年	「沖縄トロピカルリゾート構想」策定 第一回世界のウチナーンチュ大会開催
平成四(一九九二)年	首里城正殿の復元が完成
平成五(一九九三)年	NHK大河ドラマ「琉球の風」放映
平成六(一九九四)年	沖縄県開発公社と沖縄県観光連盟が統合して沖縄ビジターズビューローが発足
平成七(一九九五)年	識名園復元、一般公開

昭和四十七(一九七二)年	日本交通公社協定旅館連盟沖縄支部長、近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟沖縄支部長、東急観光沖縄支部長、那覇市観光ホテル旅館事業協同組合理事長に就任
昭和四十八(一九七三)年	日本交通公社協定旅館連盟から沖縄総会に対しての表彰、沖縄県知事から沖縄特別国民体育大会協力に対しての表彰、沖縄地区税管長から税管行政協力に対しての表彰を受ける
昭和四十九(一九七四)年	沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合理事長、国際観光旅館連盟沖縄県理事長、国際観光旅館連盟九州支部副支部長に就任
昭和五十一(一九七六)年	はじめて観光キャラバン隊を編成して全国を回る
昭和五十二(一九七七)年	沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合連合会会長に就任 衆議院沖縄問題特別委員会に証人として出席
昭和五十三(一九七八)年	沖縄観光振興の功績によって藍綬褒章を受章
昭和五十六(一九八一)年	沖縄県観光開発公社理事に就任 琉球新報社より産業功労賞を受賞
昭和五十九(一九八四)年	沖縄県知事より産業経済功労賞を受賞
昭和六十一(一九八六)年	社団法人札幌観光協会より観光功労賞を受賞 財団法人沖縄コンベンションセンター理事に就任
平成三(一九九一)年	オキナワコンベンションビューロー相談役に就任
平成七(一九九五)年	沖縄ビジターズビューロー顧問に就任

平成八(一九九六)年	沖縄ビジターズビューロー、沖縄コンベンションセンター、オキナワコンベンションビューローの三団体が統合して財団法人沖縄観光コンベンションビューロー(OCVB)が発足
平成十(一九九八)年	観光文化局から観光リゾート局に変更、観光企画課と観光振興課を設置
平成十一(一九九九)年	沖縄職業能力開発大学校・沖縄ポリテクカレッジにホテルビジネス科新設
平成十二(二〇〇〇)年	九州・沖縄サミット(主要国首脳会議)開催 首里城などが「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録 9・11米国多発テロによる観光客減少
平成十三(二〇〇一)年	沖縄美ら海水族館開館
平成十四(二〇〇二)年	沖縄都市モノレールゆいレール開業
平成十五(二〇〇三)年	DFSギャラリア沖縄オープン
平成十六(二〇〇四)年	沖縄県立博物館・美術館開館
平成二十一(二〇〇七)年	第一回沖縄国際映画祭開催
平成二十二(二〇〇九)年	東日本大震災
平成二十三(二〇一一)年	那覇空港LCC専用ターミナル供用開始
平成二十四(二〇一二)年	那覇空港新国際線旅客ターミナル供用開始
平成二十六(二〇一四)年	イオンモール沖縄ライカム開業
平成二十七(二〇一五)年	沖縄観光コンベンションビューロー顧問に就任 「沖縄県ホテル旅館人材育成基金(略称ミヤザト基金)」創設 総理大臣から正六位を授与される 八十六歳で逝去

参考文献(順不同)

『私の戦後史　第5集』沖縄タイムス社
『沖縄県ホテル旅館生活衛生同業組合　30年のあゆみ』
『日本交通公社協定旅館連盟沖縄支部　20年の歩み』
『沖縄観光　その活路を求めて』沖縄懇話会編
『沖縄観光とホスピタリティ産業』宮城博文
『沖縄観光進化論　大航海時代から大空海時代へ』下地芳郎
『沖縄イメージの誕生　青い海のカルチュラル・スタディーズ』多田治
『沖縄イメージを旅する』多田治
『職業としての観光　沖縄ツーリスト55年編』吉崎誠二
『観光再生　「テロ」からの出発』沖縄タイムス社
『リゾート開発　沖縄からの報告』三木健
『ほっとあいらんど沖縄』沖縄県・沖縄観光連盟、1993年
『沖縄の歴史と旅』陳舜臣
『琉球王国』高良倉吉
『民藝四十年』柳宗悦
『辻の華』上原栄子
『辻の華　戦後篇』上原栄子
『八月十五夜の茶屋　沖縄占領統治1945』ヴァーン・スナイダー、柿澤登(訳)
『戦後沖縄の社会史－軍作業・戦果・密貿易の時代－』石原昌家
『復帰後の沖縄』島袋数也
『沖縄人物シネマ　会った人、すれちがった人』牧港篤三
『無償の時代』牧港篤三
『高等学校琉球・沖縄史　新訂・増補版』沖縄歴史教育委員会・新城俊明

資料協力

沖縄タイムス社
琉球新報社
新星出版株式会社
沖縄県公文書館
那覇市歴史博物館
一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー

編集後記

合併前の最後のトップツアー協定旅館ホテル連盟沖縄支部役員会にて、沖縄観光に多大な足跡を遺した宮里定三氏の顕彰事業を実施したいとの意見が挙がり全会一致で可決、総会承認を経、3月1日に実行委員会が発足いたしました。事業内容としては「胸像建立」と「記念誌作成」、後世にその功績を伝えたいとの思いからでした。没後17年目の3月4日の命日に式典を挙行しようと試行錯誤の1年計画がスタート、今日まで作業を進めてまいりました。観光関係者やご親族から写真や文献を提供して頂き、工程表に沿って印刷会社、胸像製作会社と打ち合わせ会議を重ねました。いろいろな資料を提供頂いた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。また祝辞を頂いた翁長雄志沖縄県知事、OCVB会長の平良朝敬氏、寄稿文を頂いた平良哲氏、上原良幸氏、新城朝吉氏、亀島靖氏、インタビューにご協力頂いた大城宗憲氏、大城吉永氏、金城幸松氏、御子息の宮里一郎氏の皆様にも重ねて御礼申し上げます。また、胸像台座の前面文字を書いて頂いた三枝憲和氏、他ご尽力頂きました方々へ衷心より敬意と感謝を申し上げます。

結びに業務多忙の中、委員会作業にご協力頂きました実行委員各位に深く感謝申し上げるとともに、その労を犒いたいと思います。

平成二十八年三月吉日

宮里定三顕彰事業実行委員会

宮里定三顕彰事業実行委員会

会長
照屋　修興（ホテルムーンビーチ　専務取締役）

副会長
山本　和人（近畿日本ツーリスト沖縄　取締役 沖縄仕入販売センター所長）

委員
赤城　暁（ビーチホテルサンシャイン　取締役会長）
中村　聡（那覇セントラルホテル　代表取締役社長）
金城　仁（ホテルサンパレス球陽館　代表取締役社長）

監事
渡名喜　朝之（琉宮城蝶々園　代表取締役社長）

事務局長
新垣　安男（東武トップツアーズ㈱国際営業部　顧問）

宮里定三顕彰事業（記念誌、胸像建立）協賛（団体、個人）一覧

団体

トップツアー協定旅館ホテル連盟沖縄支部連合会
トップツアートップ会沖縄支部
日本旅行協定旅館ホテル連盟沖縄支部
日本旅行赤い風船会沖縄支部
近畿日本ツーリスト協定旅館ホテル連盟沖縄支部連合会
近畿日本ツーリスト沖縄ひまわり会
JTB協定旅館ホテル連盟沖縄支部
JTBレキオス会
OTSパートナーズネットワーク
オリオンビール株式会社
光文堂コミュニケーションズ株式会社
ザ・テラスホテルズ株式会社
合資会社沖縄関ヶ原石材
沖縄県ホテル旅館環境衛生同業組合
宮里経営事務コンサルタント
ホテルサンパレス球陽館

個人

三宅　勲
宮里　捷
五月女　貞四郎
大城　一紘
三枝　憲和（胸像台座文字書）

沖縄観光の父 宮里定三

平成二十八(二〇一六)年三月四日 発行

発　行　宮里定三顕彰事業実行委員会
沖縄県那覇市久茂地三丁目一番一号
(日本生命那覇ビル二階)
東武トップツアーズ株式会社内
電話(〇九八)八六八・八八二二

編集協力・印刷　光文堂コミュニケーションズ株式会社
沖縄県南風原町字兼城五七七番地
電話(〇九八)八八九・一二二一